

五・ツ・ツ



2008年夏季号 85

北海道ボランティア・レンジャー協議会

〔主 張〕

スミレ 雑考

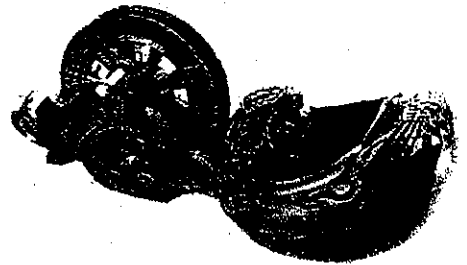
会 長 田 村 允 郁

5月の下旬、ボラレンの仲間5人で、樺戸山塊の最高峰ピンネシリ（1100m）にでかけました。絶好の登山びよりで、ゆったりとした気分を味わいました。登山途中で幾つかのスミレの仲間の花に出会いました。特に、オオバキスミレとフイリミヤマスミレが別々の場所で群生していて、オオバキスミレの黄色が新緑の登山道に彩りをそえていましたし、フイリミヤマスミレの可憐な姿に見入りました。

スミレの仲間のみを観察の対象にしている「スミレの会」が全国の各所にあるとのことですが、花の雰囲気が日本人ごのみの風情があるからなのでしょうか。

スミレとはスミレという固有種を指すと同時に、スミレ科、スミレ属を総称して使われていますが、日本には約60種が自生していて、品種まで含めると200種を超えと言われています。北海道のスミレについては81種（顕家 計麟のリスト）が確認されているそうです。

スミレの語源については諸説がありますが、私たちが観察会での解説には花（つぼみ）の形が大工道具の墨入れ（墨壺）に似ているとの説明をしますが、スミレ（須美礼）の名が登場する万葉集の編まれた奈良時代には、現在のような形をした墨壺は存在していなかったとい



在していなかったといい、語源としては疑問点も多いところですが、墨壺の形をみると、なんとなく納得してしまいます。このほかに、スミレ摘みの行事にちなんだ「摘まれる」からの転訛説や、花が草木染めに用いられたことによる「染みれ」説、食用にすると多少の酸味と楡のようなぬめりがあることによる「酢楡」説、等々がありますが、会員の皆さんはどの説を取りますか。

スミレについて調べてみると、面白いエピソードや文学作品に登場する場面がありますが、そのなかの幾つかを紹介します。宝塚歌劇団の想いと「スミレの花咲く頃」の歌詞やメロディーを口ずさめる会員の皆さんは多いと思います。

スミレの花咲く頃、初めて君を知りぬ
君を思い日毎夜毎、悩みしあの頃
スミレの花咲く頃、今も心ふるうよ
忘れないで二人の愛、スミレの花咲く頃

宝塚歌劇のテーマソングのようにになっているこの歌は、実はシャンソンではなく

オーストリアのウィーンの作曲家フランツ・デーレが1929年に「ニワトコの花咲く頃」として作曲したもので、翌年フランスにこの曲が入り「リラの花咲く頃」で大ヒットして広がりました。この時留学していた宝塚の舞台演出家、白井鉄造が、この歌が主題歌になっている「パリゼット」というレビューを歌と共に持ち帰り、主題歌「スマレの花咲く頃」として宝塚で上演したのが1930年（昭和5年）8月のことでした。この歌の原題は「ニワトコの花」であり、フランスでは「リラの花」、それが日本では「スマレの花」となっていました。ではなぜ、ニワトコからリラ（ライラック）そしてスマレとなっていたのでしょうか。勝手な解釈をすれば、オーストリアとフランスと日本の花に対する国民性なのか、はたまた、「パリゼット」というレビューに対する恋の思いの違いなのか、それとも日本では清純なイメージの宝塚歌劇団にスマレを重ねたのかもしれませんが。

日本文学では、清少納言が「枕草子」の中で草花は、なでしこ、女郎花、桔梗、朝顔、かるかや、菊、壺すみれを挙げていますし、松尾芭蕉や小林一茶はスマレを題材にした句を残しています。

植物図鑑などでスマレについて花や葉、地上茎があるか無いか等々を調べてスマレの種を同定することも興味のあることですが、語源やそれにまつわるエピソード、歴史上に記されている事柄を調べてみると、さらに興味が沸いてきますしスマレに限らず他の草花についても言えることです。ネット社会の今、ホームページを検索することによって容易に色々なことを調べることもできます。ですから、樹木や野草、動物や昆虫、自然の仕組み等、面白い情報が交流できたらいいと思いますし、そのような交流ができる仕組み（メーリングリストなど）を考えていきましょう。

註 ニワトコとエゾニワトコの違い

北海道に自生しているエゾニワトコは、オオバニワトコというようにニワトコより葉が大きい。花序（花群をつけた軸）に、コブのような突起が発達しているのでニワトコと区別がでるといいます。

- 参考 ・インターネット HPより
・ファウラ No19号 2008. 輯

定期総会 自然観察、保全の意義を確認しあつて

4月26日 —簡単な報告のため総会、役員会の資料などを参照—

広報部

- 二つの研修会。総会に先立って二つの研修会が行われ、ひがしリサイクル代表取締役の東龍夫さんからリサイクルの意義と問題点、道自然環境課主任の富樫嵩さんから外来生物が生態系に与える影響や捕獲などの仕方について話された。東さんは特にペットボトル、アルミ缶などのリサイクル上の問題点にふれられた。ペットボトルは一回しか利用できないし、アルミ缶は生産そのものを含めて膨大なエネルギーを消費する。リサイクルそのものは多量のエネルギーを使うばかりだけでなく、加熱する際にはCO₂が発生するし、残ったゴミの処理、など多くの問題点をかかえている。ペットボトル、アルミ缶などは削減する（リデュース）、ビンをはじめいろいろな用具は再利用（リユース）を心がけて環境保全につとめることが大切であると話された。ペットボトルの内側には化学物質、アルミ缶の内側には樹脂がぬらされている。それが人体への影響はまだ分かっていないようである。

つづいて、富樫さんはウチダザリガニ、アライグマなど外来生物が生態系を破壊していることについて、特にセイヨウオオマルハナバチにふれ、その捕獲の仕方についても説明された（後のページに資料の一部）。

《 新役員に佐藤（敏）、室野、村上、菅さんを選出 》

- 総会。田村会長が地球温暖化に向かつて、自然とどう関わっていったらよいのか、みんなで考えて活動していきたいと挨拶された。
道自然環境課野幌森林公園分室主査の立花英之さん、ふれあい交流館副館長の山田健さんからは、今日の自然・環境をめぐる状況と自然観察の意義について話された。私たちの活動に対する励ましのメッセージをいただいた。
司会に篠内さんを選び議案の審議に入る。春日事務局長から報告があつて、1号議案、19年度事業計画、決算を拍手で承認しあつた。つづいて、事務局長から2号議案、20年度事業計画、予算案に関して提案された。研修会の日程、場所の選定は役員会で決定し総会で承認を受けること、今年は新しくアポイ岳登山、研修を実施すること、30周年行事に向けて毎年3万円を預金していくことなどが承認された。
役員の新選に入り、写真家でもある佐藤敏幸さん、卓越したパソコン技術者室野文雄さん、花などにとてもくわしい村上菜穂子さん、菅美紀子さんを新しく選出した。今後の活躍がおおいに期待される。田村会長を中心としたこれまでのスタッフと力をあわせて一層活動をもりあげていってもらいたい。
なお、野鳥観察のスペシャリストである荻野さんが退任された。今後も観察会などで協力を願う。(S)

平成20年度 第23回定期総会日程

日時 平成20年4月26日(土曜日) 13:00~16:30
会場 札幌エルプラザ2階 環境研修室1
受付 13:00~13:30
研修会 13:30~15:10
総会 15:15~16:30

《研修会》

研修Ⅰ 13:30~14:40

「持続可能な循環社会の実現のために」

(有) ひがしリサイクルサービス代表取締役

東 龍夫 様

研修Ⅱ 14:45~15:10

「セイヨウオオマルハナバチバスターズ」について

北海道環境生活部環境局自然環境課

セイヨウオオマルハナバチ特定生物グループ主任

富樫 崇 様

《定期総会》

司会進行

三崎 篤

(出席・委任状・総会成立確認)

1. 開会

2. 会長挨拶 田村会長

3. 来賓紹介と来賓挨拶

北海道環境生活部環境局自然環境課野幌公園分室主査

立花 英之 様

自然ふれあい交流館館長

氏家 等 様

副館長

山田 健 様

4. 議長選出と議事録署名人の選出

5. 議長就任挨拶と議事録署名人の紹介

6. 議事

1号議案

・平成19年度事業報告

・平成19年度決算報告並びに監査報告

2号議案

・平成20年度事業計画(案)

・平成20年度収支予算(案)

3号議案

・役員改選

・その他

7. 議長退任

8. 閉会

《連絡事項》

懇親会 17:30~19:30 たじま屋本店 北区北6条西1丁目

1号議案

1、平成19年度事業報告

(1) 観察会事業

月	行事名	実施月日	集合・解散場所	参加人数		備考
				一般	会員	
4	春の花を見つけよう	26日(木) 10:00~12:30	交流館集合・解散	48	11	共催
5	春のありがとう観察会	13日(日) 10:00~14:30	交流館集合・解散	33	15	共催
	濃昼古道研修会	16日(水)			9	研修
	恵庭公園観察会	20日(日) 10:00~12:00	恵庭公園駐車場集合・解散	10	5	主催
	三角山登山観察会	27日(日) 10:00~14:00	緑花会館登山口集合・解散	8	9	主催
6	森の新緑観察会	3日(日) 10:00~12:30	交流館集合・解散	66	10	共催
	鷗川桜草観察会	9日(土)~6.10(日)	鷗川四季の館		23	主催
	北広島レクの森観察会	17日(日) 10:00~12:30	レクの森入り口集合・解散	21	7	主催
	東大演習林研修	29日(金)~30日(土)			24	主催
7	初夏の森観察会	8日(日) 10:00~12:30	交流館集合・解散	12	12	主催
	芸術の森周辺観察会	22日(日) 10:00~12:00	芸術の森停留所前集合	7	9	主催
8	夏の森の観察会	2日(木) 10:15~12:30	開拓記念館前集合 瑞穂池園地解散	66	8	共催
	ワッカ原生花園、帯呂遺跡	4日(土)~5日(日)			10	主催
9	秋の花でにぎわう森を歩こう	13日(木) 10:15~14:30	開拓記念館前集合・解散	105	14	共催
10	森の匂いをかごう	14日(日) 10:00~14:30	交流館集合・解散	52	17	共催
11	晩秋の森観察会志文別コース	3日(土) 10:00~14:30	交流館集合・解散	5	11	主催
	秋のありがとう観察会	11日(日) 10:00~12:30	交流館集合・解散	29	15	共催
	西岡水源地自然観察会	23日(金) 10:00~12:30	管理事務所前集合・解散	8	10	主催
1	円山登山観察会	20日(日) 10:00~12:30	円山登山口集合・解散	6	5	主催
2	藻岩山登山観察会	17日(日) 10:00~14:30	慈恵会登山口集合・解散	1	7	主催
	冬の森の観察会	24日(日) 10:00~12:30	交流館集合・解散	17	4	共催
3	野幌の春を探そう	23日(日) 10:00~12:30	交流館集合・解散	71	12	共催
	参加者総数			565	247	

(2) 地方・支部の活動報告

①小樽支部観察会

実施日	行先	参加人数			
		一般	会員	補助	計
4月28日	オタモイ～赤岩山	34	6	3	43
5月5日	塩谷丸山	20	8	2	30
5月16日	濃屋山道(厚田、浜益)	19	15	3	37
6月2日	穴滝とその周辺	20	5	3	28
7月20日	原始ヶ原から富良野岳	17	5		22
9月5日	徳舜警山、ホロホロ山	20	5		25
10月20日	自然の村～穴滝	16	2		18
11月10日	小樽市有林内	17	5	3	25
2月23日	天狗山東斜面	12	6	1	19
3月22日	天狗山～オコバチ川	19	5	2	26
合 計		194	62	17	273

(3) 研修会事業

- ・ 4月21日(土) 演題「漁業から見た水資源」
講師 石川 清 氏(北海道漁業環境保全対策本部 研究室長)
 - ・ 5月16日(水) 濃屋古道研修会(小樽支部と合同)
 - ・ 6月9・10日(土・日) 鶴川桜町観察会(研修会を兼ねる)
 - ・ 6月29・30日(金・土) 富良野東大演習林研修
(一日目:富良野西岳登山、高山植物観察など・二日目:大麓山登山、植林、下枝はらい、
倒木更新観察などたくさん)
 - ・ 8月4・5日(土・日) ワッカ原生花園研修会 主管:オホーツク支部
- (注) 各種観察会の下見を会員研修の場として実施

(4) 他団体への協力派遣事業

- ・ 4月24日(火曜日) 環境道民会議 10:00～12:00 かでる2・7 2名参加
- ・ 5月22日(火曜日) 野幌森林公園内ゴミ拾い事業「クリーンクリーン野幌森林公園」
2名参加 ボラレンは、この事業の後援団体になっている。
- ・ 9月21日(金曜日) 江別第二小学校三年生総合学習対応 ボラレン会員5名参加
- ・ 7月28日(土曜日) 北広島市レクの森の自然観察会 担当:石狩支庁地域振興部環境生活課
自然環境係 自然解説員4名の派遣要請あり、対応した。

(5) 広報誌「エゾマツ」・「自然観察NOW」発行事業

- ・ 2007/06/28 エゾマツ 81号 発行
- ・ 2007/10/19 エゾマツ 82号 発行
- ・ 2008/01/30 エゾマツ 83号 発行
- ・ 2008/03/30 エゾマツ 84号 発行

(6) 会議

- ・2007/05/14 第1回役員会 18:30～ エルプラザ会議コーナー
- ・2007/09/10 第2回役員会 18:30～ エルプラザ会議コーナー
- ・2008/01/30 第3回役員会 18:30～ エルプラザ会議コーナー
- ・2008/04/10 第4回役員会 18:30～ エルプラザ会議コーナー

(7) 「自然ふれあい交流館」との関わり

①指定管理者制度の「自然ふれあい交流館」との関わりのソフトランディングは、スムーズに進行した。

②育成研修会について

- ・期日：2007/09/28～30（金～日）
- ・場所：自然ふれあい交流館・野幌森林公園・北海道開拓の村
- ・主催：自然ふれあい交流館
- ・共催・北海道ボランティア・レンジャー協議会
- ・協力：北海道開拓の村

◆準備日程

- ・2007/05/13 自然ふれあい交流館との打ち合わせ
- ・2007/09/14 担当者打ち合わせ会 札幌エルプラザ4F 男女参画研究室
- ・2007/09/28 午前 野外実習の留意点についてフィールドに出て下見

◆ボラレン担当部分

- ・2007/09/29 10:20～12:20 野外実習くボランティア・レンジャーの活動の実際>
- ・2007/09/30 09:40～16:00 講義、実習・プログラム作成・フィールド発表・まとめ

◆受講者は定員30名 早々と定員になった

◆本会への加入者 15名

(8) 主催事業等のPR

①北海道ウォッチングガイドに掲載・札幌市環境局発行「エコポロ」に掲載・札幌市の区民センターなどにチラシを置いてもらう・暮らしの新聞社「まんまる新聞」に掲載

②北海道ボランティア・レンジャー協議会のホームページの立ち上げ

- ・ホームページアドレス <http://volaren.sakura.ne.jp>
- ・メールアドレス mailbox@volaren.sakura.ne.jp

③北海道新聞のホームページに・札幌市環境プラザのホームページの「えこぼろ」に

(9) 北海道フラワーソンに参加

- ①北広島レクレーションの森
 - ・6月16日～ボラレン会員9名
 - ・6月17日～観察会参加者21名 ボラレン7名
- ②定山溪地区
 - ・6月16日～ボラレン会員6名

(10) 北海道ボランティア・レンジャー協議会20周年記念事業報告

「自然観察ハンドブック」～未来に残そう豊かな自然

予定より一年遅れの発行となったが、12月27日、全会員に発送した

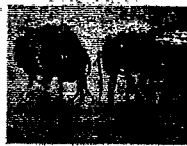
(11) その他の活動

- ・5月15日(月) ボランティア活動保険加入手続き
- ・10月29日(月) 札幌市河川計画課から、「西岡水源地観察会」を、ホームページに掲載したいの連絡あり。了解をした
- ・11月7日(土) 「活動団体における環境に関する活動状況調査」への対応 札幌市環境局環境事業部計画課
- ・12月1日(土) ボラレン忘年会 28名参加
- ・12月11日(火) 「サミットリンケージセミナー」への登録依頼があり、オーケーした。
発信：北海道経済産業局・北海道開発局・北海道
- ・12月25日(火) 自然ふれあい交流館と打ち合わせ～平成20年度共催観察会、育成研修会について
- ・12月28日(金) アポイ岳研修について 様似町教育委員会と対応開始
- ・1月30日(水) 総会会場の申込・総会研修の講師の依頼
- ・2月4日(月) 平成20年版「環境NGO総覧」作成調査・財団法人日本環境協会対応

富樫さんの講演から(その資料の一部) ①

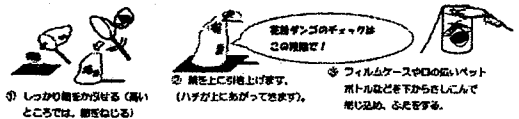
セイヨウオオマルハナバチによる影響

- 1 営業場所やエサを巡る在来マルハナバチとの競合
- 2 盗蜜行動により、在来マルハナバチに花粉を運んでもらっている植物の繁殖を妨害
- 3 交雑により、在来マルハナバチの繁殖を妨害
- 4 外来の寄生物が広まる



31

捕獲方法



- ・ハチには直接さわらないこと
- ・網を持ち上げるときは、クリップなどを使用する
- ・ハチが逃げようとした時は、無理に手を出さないこと

刺されてしまった場合は・・・

- ①安全な場所に避難し安静にする
- ②水で刺された場所を洗い流し、冷却剤などで冷やす
- ③反応は個人差が大きく、ショック症状を引き起こす場合があるので、早めに病院で治療を受ける

37

活動にあたっての留意事項

- ①防除従事者証を携帯すること
- ②腕章を着用すること
- ③防除活動はボランティアとする
→活動に要する経費は自己負担
- ④事故やケガなどないよう安全確保に十分注意すること
→安全管理(保険の加入)など

2、平成19年度収支決算書

平成19年4月1日～平成20年3月31日

収入総額 668,806円

支出額 435,471円

差引 233,335円(次年度へ繰越)

収入の部

単位:円

項目	予算額(a)	決算額(b)	差額(a-b)	摘要
前年度繰越金	203,545	203,545	0	
年会費	375,000	410,000	▲35,000	126×3000=3788000,16×2000=32000
雑収入	11,455	55,261	▲43,806	保険料・観察会協力者礼金他
合計	590,000	668,806	▲78,806	

支出の部

単位:円

項目	予算額(a)	決算額(b)	差額(a-b)	摘要
総務部費	100,000	140,139	▲40,139	腕章作成費用・役員会交通費・会議室借用費・振替手数料
事務局費	100,000	34,205	65,795	通信費・事務費・雑費
研修部費	100,000	58,762	41,238	研修会講師謝礼・研修雑費
活動費	100,000	70,100	29,900	地方支部活動費・観察会交通費・雑費
広報部費	160,000	132,265	27,735	
予備費	30,000	0	30,000	
合計	590,000	435,471	154,529	

20周年記念事業決算(19年度分)

自然観察ハンドブック製作費用

単位:円

項目	金額	摘要
印刷製本費	268,800	印刷会社への支払い費用
会議費	51,224	編集会議(12回)委員に対する交通費実費、昼食費
資料費	30,000	原稿作成にかかる取材費、交通費、プリント代他
通信費	11,810	会員・関係先配布送料
事務用品費	3,820	封筒・宛名シールほか消耗品
合計	365,654	

(参考)

1、20周年記念事業総決算

実施期間 平成18年4月1日～平成20年3月31日

事業名	実施時期	事業費	主な費用内訳
共通管理費	18年度	32,933	通信費、役員会費ほか
記念写真展	18.9.2～9.30	14,291	用品費、作品輸送費ほか
会員研修会	18.9.18	70,420	講師謝礼金ほか
記念講演会	18.10.9	129,849	講師謝礼金、資料印刷費、会場費ほか
エソマツ特集号	18.12.13	46,893	印刷製本費、編集会議費、資料費ほか
ハンドブック	19.12.12	387,304	
計		681,490	

2、20周年事業準備金について

18.3.31残高	941,086
18年度取崩し額	315,836
19年度取崩し額	365,654
期中貯金利息	528
20.3.31残高	260,124

平成19年度財産目録

平成20年3月31日

科目	金額	科目	金額
通常貯金	493,459	一般会計繰越金	233,335
		特別会計	260,124
計	493,459	計	493,459

備品

救急医療セット1箱、聴診器5本、望遠鏡2台、双眼鏡14台、簡易アイゼン5脚

監査報告

私たち監事は、会則第11条の5に基づき、平成19年4月1日から平成20年3月31日までの会処理について、会計帳簿及び証憑書類を精査検証した結果、適正なものと認めます。

平成20年4月10日

監事 高松 文雄
監事 猪師 勉

2号議案

1、平成20年度事業計画（案）

(1) 事業計画の方針

目標「自然との共存、日常の実践から」

- 重点
- 1、観察会の企画や実施と運営についての研修と実践につとめる
 - 2、会員の意見や社会の要請を受け止め、会の活動改善に生かしていく
 - 3、育成研修会での入会者の勧誘に努める

具現化の視点

- 1、会務のシステムの遂行を試みる
- 2、研修テーマを設定した下見会と下見後の開花情報を効果的なものにする試み
- 3、育成研修会のボラレン担当部分の充実
- 4、事前に観察会当日のボラレン会員参加数を把握する試み
- 5、ボラレンの活動領域の広がりを探る
- 6、主催事業等のPRに努める

(2) 会議

①定期総会

20年度定期総会 平成20年4月26日（土） 札幌エルプラザ

21年度定期総会 平成21年4月18日（土） 札幌エルプラザ

②役員会、理事会を年4回（5月・9月・1月・4月）開催、三役会は必要に応じて開催

- ・5月12日（月） 第1回役員会
- ・9月17日（水） 第2回役員会
- ・1月30日（金） 第3回役員会
- ・4月10日（金） 第4回役員会

(3) 観察会・研修会・調査活動

- ①観察会については別紙による。また、サークル活動の観察会があれば随時実施。支部合同の新しい方向を探る。
- ②研修会については別紙による。会員の要望と必要を取り入れ新しい試みを探る。
- ③観察会の下見と実施後の反省をもとに記録の集積を図り、活用できるものに仕上げる。
- ④テーマをもった下見会の実施を試みる。

(4) 育成研修会

- ①研修部を中心とした特別委員会を設定し、立案・実施にあたる。

(5) 他団体への協力

- ①観察会ガイドの要請については、主催の目的などを把握して協力していく。
- ②各関係機関や団体が行う自然環境保全に関わる行事や調査には参加していく。

(6) 広報誌「エゾマツ」発行

- ①年4回（6月中旬・10月中旬・1月中旬・3月下旬）の発行
- ②紙面内容と体裁の充実に努力していく
- ③観察会一般参加者に「自然観察NOW」の配布

(7) 支部や地方会員の活動の活性化

- ①支部や地方会員の活動化に事務局は積極的に取り組む。
- ②各会員の思いや要望の発信を受け止めたり、広報誌による交流を活性化させる。
- ③ 会員数を増やすための働きかけを強めていく。

2、特別会計について

(1) 特別会計 260,124円は、このまま継続する。

(2) 特別会計の増強について 260,124円+目標額=500,000円

①目標額 240,000円

③積立期間 平成20年から平成28年まで8年間

③各年の積立金額 30,000円

④積立金の変更 期中見直しを必要とする場合は役員会に諮り積立の中断もしくは積立金額の変更が出来るものとする

参考

過去5年間の収支の状況

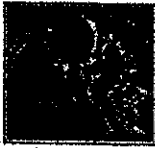
年度	収入	除・繰越	会費収入	支出	余剰金 d	余剰金 e	c/a	c/b
	a	b		c	a-c	b-c		
19	668,806	465,261	410,000	435,471	233,335	29,790	65.1	93.6
18	626,192	442,050	397,000	422,647	203,545	19,403	67.5	95.6
17	577,182	386,408	375,000	393,040	184,142	6,632	68.1	101.7
16	554,707	404,008	386,000	363,933	190,774	40,075	65.6	90.1
15	736,607	389,811	381,000	585,908	150,699	▲196,097	79.5	150.3

富樫さんの講演から

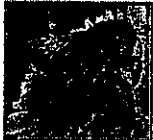
(その資料の一部) ②

誤捕獲に注意!


北海道には11種類の在来マルハナバチが生息



エゾオマルハナバチ
【お尻は濃いオレンジ】



エゾガマルハナバチ
【臭い強と苦】



アカマルハナバチ
【体が赤茶色】

※道東(根室、野付半島)には、非常に数が少ないノサブマルハナバチが生息していますので、注意が必要です(働きバチのお尻が白いので誤認しやすい)

平成20年度 観察会・研修会予定(案)

月	行事名	実施月日	下見	集合・解散場所		備考	テーマ	当番
4	春の花を見 つけよう	24日(木) 10:00~12:30	17日(木)	交流館集合・解散	共催	昼食持参 自由	早春の花・ 野鳥観察	
	赤岩山と胎内巡 り	27日(日) 9:00~14:30		路線バスオタ モイ駐在所前 9時	小樽と札幌 と小樽博物 館の共催	昼食持参	札幌支部は 研修として 参加	
5	春のありがとう 観察会	11日(日) 10:00~14:30	10日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食・ゴミ 袋・軍手持 参	ゴミ拾い・春 の花観察	
	恵庭公園観察 会	18日(日) 10:00~12:00	17日(土)	恵庭公園駐車 場集合・解散	主催	昼食持参 自由		小林・橋場
	三角山登山観 察会	25日(日) 10:00~14:00	24日(土)	緑花会館登山 口集合・解散	主催	昼食持参		菅・熊野
	アポイ岳研修	5月31日(土)~6 月1日(日)		アポイ岳調査 研究支援セン ター	研修	宿泊研修		小林・春日
6	北広島しくの森 観察会	8日(日) 10:00~12:30	7日(土)	しくの森入口 集合・解散	主催	昼食持参 自由		村上・佐藤・ 我妻
	森の新緑観察会	15日(日) 10:00~12:30	14日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参 自由	初夏の草花	小林・室野
	東大演習林研修	27日(金)・28日 (土)			主催	宿泊研修		小林・宮田
7	初夏の森観察会	6日(日) 10:00~12:30	5日(土)	交流館集合・解散	主催	昼食持参 自由		佐藤敏幸・ 春日
	芸術の森周辺 観察会	20日(日) 10:00~12:00	19日(土)	芸術の森停留 所前集合	主催	昼食持参 自由		今村・三崎
8	夏の森の観察会	7日(木) 10:15~12:30	7月31日 (木)	村集合・瑞穂 の池解散(時 計回り)	共催	昼食持参 自由	夏の花観 察・瑞穂の 池	室野・伊藤
	鶴川研修会	30・31(土・日)		鶴川四季の館	主催			小林・門村・ 萩野
9	秋の花で賑わ う森を歩こう	11日(木) 10:15~14:30	4日(木)	村兼着・交流 館昼食休憩	共催	昼食持参	秋の花観察	菅・春日
	育成研修会	26日(金)~28日 (日)						
10	秋の森の匂 いをかごう	19日(日) 10:00~14:30	18日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参	紅葉・木の 実観察	
11	晩秋の森観察 会志文別コース	3日(月) 10:00~14:30	2日(日)	交流館集合・解散	主催	昼食持参		
	秋のありが と観察会	9日(日) 10:00~12:30	8日(土)	交流館集合・解散	共催	ゴミ袋・軍 手持参	ゴミ拾い、木 の実・草の 実観察	
	西岡水源地 自然観察会	23日(日) 10:00~12:30	22日(土)	管理事務所前 集合・解散	主催			
1	円山登山観 察会	18日(日) 10:00~12:30	17日(土)	円山登山口集 合・解散	主催			
2	冬の森の観 察会	15日(日) 10:00~12:30	14日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参・ 自由	野鳥・雪上 観察・交流 食事会	
	蕨岩山登山観 察会	22日(日) 10:00~14:30	21日(土)	蕨岩山登山口 集合・解散	主催	昼食持参		
3	森の中で春 を探そう	22日(日) 10:00~12:30	21日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参・ 自由	芽吹き・野 鳥観察・交 流食事会	

※東大演習林は、第一日目は、山部の太陽の丘周辺でフィールド研修、夜は演習林の宿泊棟へ。
二日目は演習林での研修。

※この計画案は、4月26日の総会の議決を経て正式のものになります。

年度初めの行事は、総会の議決後の周知作業では間に合いません。この通りになりますから、
会員の皆様は、この予定表に基づいて対応してください。

※アポイと東大演習林については、後日、研修部がハガキで参加のとりまとめをします。

平成20年度予算(案)

収入の部

単位:円

項 目	予算額	前年度予算額	摘 要
前年度繰越金	233,335	203,545	
年会費	390,000	375,000	会費130×3000円
雑収入	11,665	11,455	保険料、協力者礼金
合計	635,000	590,000	

支出の部

単位:円

項 目	予算額	前年度予算額	摘 要
総務部費	100,000	100,000	
事務局費	100,000	100,000	荘会案内等通信費、会議室借用費、振替手数料
研修部費	100,000	100,000	通信費、事務用品費
活動費	100,000	100,000	研修会講師謝礼金、研修雑費
広報部費	160,000	160,000	地方支部活動費、観察会交通費
予備費	45,000	45,000	会報エソマツ制作費、郵送費
特別会計	30,000		
合 計	635,000	590,000	

2008年 小樽支部自然観察会予定表

(北海道ボランティア・レンジャー協議会・小樽支部)

No.	月/日(曜日)	行き先	見どころ	集合場所・時間(担当リーダー)
1	4/27(日)	赤岩山と胎内通り	春植物	路線バス、オタモイ駐在所前9時/ ボラレン札幌、博物館共催(北原)
2	5/5(月)	塩谷丸山	初夏の植物	JR塩谷丸山駅前駐車場、8時30分(大川)
3	5/16(金)	濃昼山道、或、金山	山道の景観	貸切バス、小樽駅向かい、第三ビル前バス停付近へ6時まで(松原)
4	6/1(日)	穴滝、小樽峠、松倉岩	ミスバショウ	天神浄水場(奥沢水源地向かい)9時(魚野)
5	7/10(木)	シラカバ、シャブナゲ岳	高山植物	貸切バス、小樽駅向かい第三ビル前、バス停付近6時30分(一鉄)
6	9/13(土)	春香山	樹木・野草	桂岡浄水場先駐車場9時(魚野)
7	10/11(土)	自然の村～穴滝	紅葉、キノコ	自然の村前駐車場9時(松原)
8	10/30(木)	天狗山～自然の村(納会)	カラマツ黄葉	天狗山バス停前駐車場9時(北原)
9	2/21(土)	小樽市有林内	カンジキ歩き	小樽商業高校前バス停9時(大川)
10	3/20(金)	天狗山～オコパチ川	カンジキ歩き	天狗山ゴンドラ乗り場9時30分(一鉄)

参考

- ①約1週間前、道新小樽版、読売金曜夕刊版に集合場所、時間等を再掲します。
- ②天候外の都合で日時等を変更することもありますので、事前に申し込み願います。
- ③参加料は、一人300円、貸切バスは実費、当日、受付でお願いします。
- ④自家用車の方は、その旨連絡願います。(駐車場の状況、乗り合わせの可否など)
- ⑤申し込み、問い合わせ等は、0134-27-1701 北原迄。

よかったことイッパイの「アポイ岳登山・研修会」

春日 順雄

5月31日、いつ雨が降っても不思議でない空模様の中、午後1時半、アポイ岳調査研究支援センターに集合。研修Ⅰはアポイビジターセンターでの自己研修である。アポイの植物の固有種を写真で勉強した。そして、橄欖（カンラン）岩との出会いがあった。カンラン岩で出来た将棋盤は重かった。比重が3.3とのこと。岩石の中でも一番重い。磨かれた橄欖岩は、濃い緑色で透明感があり美しかった。カンラン岩を構成する鉱物のカンラン石は、8月の誕生石でペリドットである。美しいはずである。

研修Ⅱは、様似教育委員会勤務、そして、アポイファンクラブの事務局次長である田中正人さんが講師を引き受けてくださった。PCのパワーポイントを使用して、中学生を対象として作成したものということであったが、私たちにもピッチの内容だった。実に明快、分かり易く、示唆に富むものであった。

北海道は、ユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレートの押し合いへしあいの結果できた。その時、上部マントルが押し上げられてアポイ岳ができた。アポイ岳は金山、カンラン岩と蛇紋岩からできている。アポイのカンラン岩は、世界的に有名で多くの研究者がこの地にやってくる。カンラン岩は、マグネシウムや鉄の含有が多い石である。アポイに固有種が多いのは、植物が育ちにくいマグネシウム等を含む土壌に原因がある。

かつて、北海道にも氷河期があった。氷河期が後退して寒さに適応していた植物たちは寒さが残る高地へと生育の地を移していった。それが現在の高山植物である。高山植物は氷河時代の生き残りである。

ここ十数年、短期間のうちに、その高山植物が急激に数を減らしている。原因の一つは人間。登山ルートを外れての登山あり、ルートを外れての休憩や昼食があり、盗撮もあった。二つ目は、氷河期の生き残りとしての高山植物だから、温暖化の影響を最初に、まともにもうけているのではないか。

アポイファンクラブは、高山植物の再生実験や巡回、アポイからピンネ方向の登山道のハイマツを伐採するなどの活発な活動を行っている。活動の活発さの原動力の一つは官民一体ということがある。アポイファンクラブの活動は様似町の活動であり、様似町の活動はアポイファンクラブの活動であるという香りがした。そして、アポイを愛してやまない人たち、活動の活性化は「一生懸命働くこと、そして、飲み交わすこと」と述べた田中さんの言葉に、そうなんだ、ちからイッパイ働ける対象としてのアポイ岳があって、アポイ岳を介在とする暖かい人間関係が出来て、アポイにぞっこんほれ込んだ人間集団が出来た。それが、アポイファンクラブなんだと理解した。

夜は懇親会。アポイファンクラブからは、会長以下5名の参加有り難かった。ビジターセンターでお世話になった近藤京子さんも参加。名刺には「あなたとの出会いは生きていくごほうび」という素敵な言葉があった。酔うにつれ「ピンちゃん。」「ブンちゃん。」なん

て打ち解けた雰囲気、この人間関係が仕事を進める。ファンクラブの人たちは、よく仕事もするし、人間関係を育てる名人でもあるな。翌日、ビジターセンター前で加藤さんから、「ブンチャン」「ピンチャン」などの声かけがあつていい雰囲気の中での登山だった。

東大演習林の宮本先生はカナダからの研修生ディロンさんを伴って参加。チョップリ国際色豊かな研修会になった。ディロンさんは、かなり日本語を理解する。酒は心の栄養だからというが、みんな饒舌になった。ディロンさんとの対話もはずんだ。無口な日本人男性観が支配的であるが、二日間にわたりディロンさんに話しかけるオジンたちの姿があり微笑ましかつた。

懇親会の終わりごろには、タンポポの遺伝子レベルの研究のために宿泊中の東京農業大学の宮本先生をはじめとする4名のグループとの交流もあった。

6月1日、チョップリの小雨。だが、アポイの頂上は見える。6時45分出発。林床はミヤコザサ。ところどころにサンショが自生している。いずれも札幌近辺では見られない景色だ。沢の石をはぐってニホンザリガニを見たり、宮本先生の説明を聞きながら、まとまった集団という状態で、8時半ごろ、5合目の小屋に達した。樹林帯を抜けて、ここからは高山帯の趣である。雨はないが、油断すると身体が持っていかれそうな強風である。アポイの頂上はくっきり見える。ここから、集団としての統率が乱れる。健脚組は、どんどん高度を上げていく。一方、観察重点組は、宮本先生を中心に図鑑片手にアポイの固有種の観察に没頭しながら、スローペースで高度を上げていった。エゾノシロバナシモツケ・エゾタカネニガナ・アポイクワガタ・チシマキンレイカ・アポイカラマツ・サマニユキワリ・アポイゼキシヨウ・チングルマ・アポイアズマギク・ミヤマオダマキ・チシマキンレイカ・エゾキスミレ・サニマオトギリ・ヒロハヘビノボラズ・キタヨツバシオガマ等を観ることができた。残念ながら、ヒダカソウは見られなかった。

馬の背から幌満への分岐点を過ぎたあたりからの景色は抜群であった。浦河・三石方向から襟裳岬方向にかけての海岸線がくっきり見えた。植物を見、景色を見、至福の中に頂上に到着した。時刻は、10時45分ごろであった。

アポイは不思議な山であった。5合目から9合目ぐらいまでは高山帯の風情。頂上は樹林帯であった。太平洋から吹き付ける強風や海霧の影響を受けてのことであるということであった。

登山、下山共に雨なし。雨が降り出したのは、様似を後にした車の中であった。空の神様がいたとしたら、わがボラレンに配慮してくれたなと思った。

どうしても手前味噌なことになってしまうが、お許しいただきたい。今回の研修会は、天が味方し、官民一体のアポイファンクラブが味方し、いい試みであった。

アポイ岳調査研究支援センターの使用を許可し、田中正人様の講師派遣を許可して下さった教育委員会と、その窓口になった社会教育課長の水野洋一様にはお世話になった。さて、我がボラレンは、ここで築かれた絆を大事にしたいものである。「ノコギリ持参でアポイに来てみるか。」そんな声もあつたが、「絆を大事に」を次年度の課題としたい。

5月31日のアポイ岳登山と植物研修会に参加した。H18年にボラレンに入会し、私の場合参加するのは遠出の研修会とメンバーの顔が見える定期総会という事で会にはあまり貢献はしていないがまあ「参加することに意義がある」の精神で参加させてもらっている。入会したのも、ボラレンが何たるかも知らずに佐藤敏から「おもしろいから参加しないか」の誘いに退職を間近に余暇の間口を広げておきたかった私欲と合致して登別の研修に参加しざ入会したものの、登山は好きで若い時から細々と続けていたが可愛く咲いた高山植物が目に入るようになったのは女房達と登るようになったほんの10年前くらいからでその前はただいっさんに登るだけという状態だったものゝ花などは目に入らなかった。自慢じゃないが若い時から記憶力が悪くさんざん苦勞したのでやっと退職し記憶することは余りないし好きな事を思いっきり出来るなど思っていた矢先に「花・木・鳥」など覚えなければならないとなると「こりゃ無理だ」となったがそれでも本などを購入し一応は準備しているつもりだが買っただけで開くことがなければただの持ち腐れである。このままでは永久に野幌森林公園での説明員にはなれそうにないが皆の足手まといにならない様にこれからも地味に参加させてもらおうと思っている。

さてアポイ岳には数十年前に1度、そしてここ数年続けて登っているが記憶をたどると数十年前は5合目の山小屋からじきに高山植物が散見され足場もガレ場で悪く、ロープなどは無かったので好きに歩いたがこの頃では整備は行き届いてはいるが肝心の高山植物が少ないと感じる、種類はある程度あるかもしれないが数が少ない、昔は登山道のまわりや尾根の崖になった所に小さな花がへばりついてあまり身を乗り出すと危ないと感じたほどであるがこの頃はそこにあるのは這松・笹ばかりであれでは大きく育った這松の下に隠された高山植物は芽を出せないだろうと感じる、これは温暖化のせいなのかと思うが、これでは気候条件が厳しいので高山にしかない植物がたかだか810mのアポイ岳に多く見られる状態はその条件が崩れたらアポイ岳の冠を「花の山」から「緑の山」に変わってしまうかもしれないと感じた。支援センターで研修を受けた際も関係者は相当の勞力でそれを出来るだけ阻止しようと努力しているようで敬服しますが、世に言う「自然には勝てない」とならないよう念じるばかりです。

「思い」と現実の自然観察会寸感
アポイグ朽ち果てて等澗院

劍淵町・一沢六道園・梅坪

俳句にならない句であるが、これが、観察会の率直な感想である。

同行の小栗氏も小生も、様似町に等澗院があることも、その寺が徳川幕府によって建立された直轄の「官寺」であることも知ってはいなかった。

たまたま、田中さんの講話のあと、街に下りて郷土博物館の見学に出たのである。ところが、迷った揚げ句やっと探し当てた資料館の玄関のガラス戸に、古色を思わせる B4 の紙に「閉鎖」と無造作に印刷した張り紙が張ってあるのを運転席から確認できた。

小栗氏と小生は、閉鎖を「本日閉館」と読解した。

「ちょっと見てくる」

今もって衰えを知らない賢明で好奇心の旺盛な小栗氏が、車から降りて玄関の内側を執拗に覗いていた。

「どこかに移転したのかも知れない」

やや暫くして、車にいる小生に疑義の眼差しで知らせてきた。小生もそう思った。

諦めて来た道に戻ると、閑散とした港の裏通りを、普段着のふっくらした七十代の女性が家路を急ぐようにして歩道を歩いていた。

資料館について尋ねたところ、閉鎖したとも移転したとも曖昧な答であった。

様似街に入ったとき、目ざとく寺院の所在を確認していた。資料館を見れないならばと、小生は、寺院の拝観を小栗氏に申し出た。以外にも二つ返事で「観る」と言った。

その寺院が、何と文化財に指定された「等澗院・護摩堂」であった。

二人は、護摩堂の引き戸を開けて、いささかの財施をして手を合わせた。

護摩堂や一石一字初夏の海

多くの人たちの海難供養として「一石一字塔」を建立された寺院である。

文化財の護摩堂と本堂は、いささかの狂いもなく和して健やかな位置にあった。しかしいずれの史跡も手入れが行き届いていない。いな、本堂の玄関と縁側らしきところには、使い疲れた椅子などが放置されたままと思える状態で無作法に見えた。寺院内の片隅に本堂を他所に「移転」したことを知らせる案内板があった。

無情かな無常ゆえの夏一字塔

翌日、そんなことをすっかり忘れてアポイ岳登山道路を往復した。

前日に、田中さんから、お花畑の盛衰の歴史と荒廃の原因・さらには、復元の経過を学んだ。そう多くはない官民のアポイ岳の思いと辛苦の努力に感謝と敬意を深くした。

下山途中で、山道にロープを張って二人の方に出会った。目礼をして感謝を表した。そこでできることは、小生にはそれしかなかった。

小栗氏と小生には、春色に染まったお花畑への「思い」が鮮明にあった。しかし、歩めども進めども登れどもその「思い」は現実とはならなかった。田中さんの言わんとすることがあまりにも無残で残酷であることの地獄絵を見た思いではあるが、いささかも落胆したわけではない。小生の思いがあくまでも架空のそれであったからである。

ある学者が「人は歴史と古典と偉人に学べ」と言ったのを放送で聞いた。小生はそのいずれにも疎いから、その三つの意味することを十分に理解してはいないが、それに加えなければならないのは「自然」に学ぶ意志・態度・理念が大切だと思うのである。

山の荒れるのを防ぐ活動の一方で、史跡や景観・資料館と地域の文化が風化していく様を思うと、明峰を仰ぐ様似の方々が、仰ぐ明峰を支えるそれらをも大切にしたい地域社会にしていだきたいとの思いがことのほか募るのである。

冒頭の句は、その思いを自分に対して詠んだものである。

アポイ岳の数少ない美を備えた植物・岩石・地形・突如吹き上げる緑の風に揺れた老境のわが身には、ことごとく何もかにもが新鮮で力強くありがたい贈り物であった。そして、博学健啖な諸氏の教えに小生は学究の必要性を喚起させられた思いである。

下山途中で、登ってくる女性に問われた。

「これはなんという花ですか」

「アポイミヤマアズマギクかな」

アポイのキクであることは間違いないが、「ミヤマ」は記憶違いのようである。小生は、急いで付け加えた。

「私のあとから下りてくる方々は、その道の大家なので聞きなおしてください」

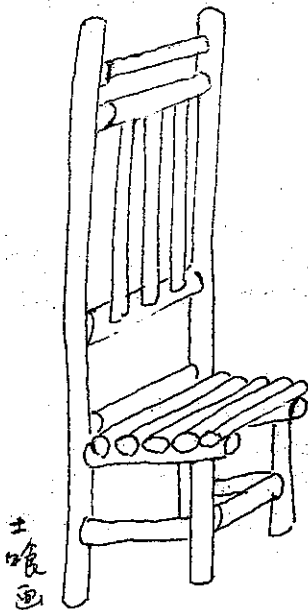
聞こえた風はなさそうである。小生は憂えた。

「コノハナ、アポイミヤマアズマギク トイウノヨ」

と仲間たちに言ってしまったら、彼女が恥をかくのではないかと。

植物の名を知ってこそ、その植物個体の美と神秘の世界を誘うことができるのではないかと思うと、皆さんとの再会がことのほか楽しみである。

帰途、小栗氏と小生は、豊似で数種のワールドフラワーの苗を買った。それらの花の名前に、冠としてアポイと付くことであろう。



土
喰
画

白樺の間伐材で
植木盆を置きを代りた。
(アポイ岳から帰る)

私たちの春の三つの観察会 — 恵庭、三角山、レクの森

◆恵庭公園観察会 5月18日(日曜日)

絶好の観察日和であった。この時期の恵庭公園のお目当ては、サクラスミレである。今年も美しい姿を見ることができた。恵庭公園の湧水を源流とするヌカンボシ川では、新緑と木漏れ日と透明感ある清らかな水の織り成す絵画的な風景が展開した。そんな景色の中で、ヒヨドリの水浴びが見られた。水あれば緑濃し、鳥集うというのであろう。小鳥のさえずりが賑やか。ミヤマエンレイソウ・オオバナノエンレイソウ・ミドリニリンソウ・ワニグチソウ・センボンヤリ・フデリンドウなど、植物も豊富であった。

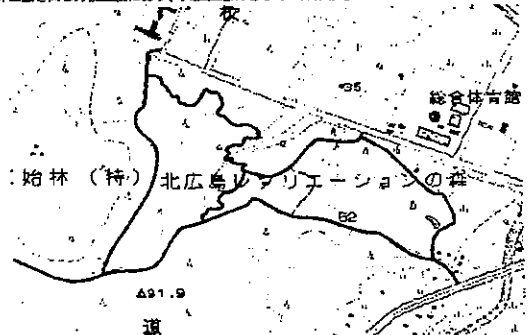
◆三角山登山観察会 5月25日(日曜日)

前日までに何件かの問い合わせがあった。交通機関や雨天でも行うかの問い合わせである。観察会は、多少の荒れ模様でも実施しますと、応じた。ところが、当日は、朝から雨模様。バス停まで迎えに行ったのに電話の主は現れない。雨もように気持ちが萎えたのでしょう。少人数の参加であったが、元気よく出発。少人数の良さが表れた観察会になった。きわめて家族的であった。うなづきと問いかけがあった。ワニグチソウを見て、オニグルミの雄花と雌花をしっかりと見、雌花の柱頭のネバネバ感を体験し、ルイヨウボタンの花を虫眼鏡でじっくりと観察し、三角山の頂上に達した。ここで雨が強くなる。休憩小屋で様子を見る。止みそうにない雨。止むなく下山。でも、楽しい観察会であった。

◆レクの森観察会 6月8日(日曜日)

前日の雨もあがって、良い観察会でした。参加者は私たちのスタッフ8人と市民の皆さん10で実施。花の好きなグループ、シダなどに関心のあるグループ、植物全般に関心のあるグループの三班に分かれて。昨年より一週間も早く実施したのですが、ホウの木、シウリザクラ、ミズキなどは花の季節が終っていたようでした。観察会に参加された市民の皆さんは関心も高く良く調べ、教えられました。昨年と同様に準備したのですが(市の広報に掲載、駅の広場に案内のポスターなど)、参加者が少なく残念でした。運動会もあったようですが。

北広島レクの森観察会(平成20年6月8日)
野幌森林公園と同じ野幌丘陵にあり、天然記念物として一部保存されている。



前二つは事務局長春日さんから
最後は広報部 佐藤 が担当

雪山カンジキ歩き自然観察会に参加して

小樽市 小林真理子

3月22日小樽支部主催の自然観察会に参加しました。北原代表、船原さん、一鉄さん、大川さん、の4名が引率して下さいました。

ロープウェイに乗り山頂へと向かい、外に出ると「鼻なで天狗さん」が、まだ、すっぽりと雪に埋もれていました。準備運動をして出発し、少し歩き始めるとスキーコースの所に出て、眼下には小樽市内、青い海の向こうには真っ青な空の下の曇寒別岳、遠くには夕張岳迄、くつきりと見る事が出来、素晴らしい景色に感激しました。

ザラメ雪（雪が腐る、と言うとの事）の中を天狗山頂上迄カンジキやスノーシューの足慣らしを行いました。天狗平に向かう途中シラカンバ、ミズナラ、イタヤ、シナノキ、等の樹皮の見分け方や、樹の木の種類や葉先の微妙な違い、直拵木肌に手を触れてみる見分け方等も教わりました。枝先の冬芽を観察し、芽のつき方の、対生と互生についても学びました。

雪で折れそうになった木の枝から、沢山の花芽が出ていて、枯れてゆく前に、新しい命を構一杯生み出そうとしている、との説明を聞き、生きる力強さを深く感じました。

遊歩道を歩いている時、シラカンバの木を走り回るエソリスを発見し、元気よく木に登って行く可愛い姿を見る事が出来、色々な鳴き声の小鳥達の姿も確認出来ました。

カンジキを履いていると、夏には歩けない所を雪の上なら、何処でも歩く事が出来、木々の間をくくつきりして、道の無い所を歩く体験ができました。

昼食の場所は、靄空の下の正面に雪の塩谷丸山が見え、観光道路が真っ白な雪の中に、一本の太くて黒い線でくつきりと描かれている一枚の絵を見ている様な、眺めの良い所でした。

食後、急な坂を下り、観光道路に下りる時、雪壁の高さが垂直で1m50cm位あり、レンジャーの方達が、階段を作って下さり、一人ずつお尻滑りで降りました。アスファルトの道路を横切り、今度は反対側への登りで、階段の登りの順番を待っている時、白い雪の上を真っ黒な小さい虫が沢山、チヨコマカと歩きまわっているのを見ました。家に帰って頂いたプリントを見ると、卵を産む場所を探して、エネルギーシユに走り回るセツケイムシと言う名の虫である事が解りました。

途中、ネコヤナギの花芽が温かい日差しの中で、銀色の毛をまとって、ぷっくらと膨らんでいて、春が近くまで来ている事を感じました。

観察会に参加して、冬の厳しい寒さを乗り越えて生きてきた、木々や、動物や、鳥や、虫の、命の逞しさから、私もこれから頑張れるパワーを受け取り、冬の眠りから目覚めようとしている山の中の春を、満喫する事が出来ました。

3/23、道新小樽版



眼下に海と雪の山々を眺めながら、早春の天狗山を歩く参加者

かんじきで雪山 春見つけた

天狗山で
自然観察

かんじきやスノーシューで雪山を歩いても自然観察会(道がランディアレンジャー協議会小樽支部主催)が二百、天狗山で開催され、好天の下、小樽や札幌の中産年二十六人が元気に春を歩いている。ロニーワエー山頂観をスタートした一行は、汗ばむ暑気の中、サラッとした雪を踏みしめて頂上を一周し、まずは足慣らし。続いて天狗平を巡って、磯線を下り、於古岳川沿いを上って北照高へと抜けるコースを、三時間余りかけてゆっくり歩いた。観察会からは、はるかに高き別岳や天張岳が望め、風わずかカメラを向けると、エゾノハツコヤナギの銀色の花芽や、川沿いの雪の上を忙しくはらうエゾシロカワラケラ(セッケンムシ)など、春を告げる動物植物を四人のレンジャーが撮影した。

北原政文部長はこのとりの観察会、シラカバの雄花も赤い色が見え始め、今年も春が早そうだと話していた。(寺町志保)

赤岩山自然観察会に参加して

小樽市 佐々木美香

4月27日日曜日、赤岩山自然観察会がボラレン小樽支部と小樽市総合博物館の共催で行われました。コースはオタモイから赤岩を通り祝津へ抜ける5kmほどの道です。

私は今シーズン初めての山歩きとなるため、良いお天気に恵まれるよう祈りながら楽しみに待っていました。ところが週間天気予報にのった27日のお天気は雨。そのうち変わるだろうと思っていたのに前日の天気予報でもまだ雨。それも降水確率がかかなり高いのです。がっかりしてしまい、準備をする手に気合が入りません。むかえた当日の朝は雨こそ降っていませんでしたが、どんよりと雲がかかっており歩いているうちに降るだろうな、という空模様でした。ところが歩き始めてみると、たまに太陽が顔を出すほどに回復。参加者60名の晴れてほしいという強い強い願が届いたのか、最後まで雨にあたることなく終えることができました。

私達は1班7、8名に分れて、ボラレンと博物館の方の説明を受けながら春の植物や昆虫を観察しながら歩きました。エゾエンゴサク、ミヤマスミレ、ナニワズ、オオカメノキ、オクエゾサイシン、ヒメイチゲなどがかわいらしい花をつけていました。またエゾエンゴサクとマルハナバチ、カタクリの種子とアリの関係などについて教えていただきました。今年は雪融けが早かったせいかカタクリが終わりかけており、早春から次の段階へ移り変わっているようで、次々と新しい植物の芽が地中から顔を出していました。

ここはアップダウンの少ないコースで、夏になるとたくさんの木で視界がさえぎられてしまうのですが、今はまだ葉がおい茂っていないので左側に赤岩の急峻な崖と日本海の美しい景色を眺めることができ、さわやかな風を感じることができました。さらに、そろそろゴールという所で、希望者だけで岩場をよじのぼる「胎内めぐり」に向かいました。赤岩はロッククライミングで有名な岩場ですので、足場が確保されているとはいえスリル満点、迫力満点の岩登りを楽しむことができました。

奇跡的にお天気に恵まれ、今シーズン初の山歩きはとても楽しく満足して終えることができました。

遠くへ行かなくても、小樽市街近郊でこれだけの自然を楽しむことができるコースですので、ぜひ毎年観察会を開いていただき、多くの方に歩いていただきたいなと思いました。

三角山登山観察会

5月25日

私は「北海道ボランティア・レンジャー協議会」をパソコンのお気に入りに入れてあります。三角山登山観察会は是非参加したいと思っていました。小雨ぱらつく朝でしたが10時集合、いつも通り観察会資料を頂きました。ページ数5枚、3枚のプリントに目をやると「一等三角点の記」が目にとまりました。標高311.3mの小さな山ですが山頂には四角い柱石で一等三角点があり、その名称は「琴似山」であるということなどが詳しく書いてありました。

山に入ると間もなく白いエゾノクサイチゴと脱皮したばかりのエゾハルゼミが迎えてくれました。少し進むとドイツスズランが人為的に植えられたのでしょう。周りとの調和もなく、自然に植わっていました。年々増えていくことを考えると生態系を混乱させる行為ではないかと思いました。雨に濡れた新緑の木々は鮮やかな緑を増し身体に浸みこんできます。小鳥のさえずりを耳にしながらいぐチソウ、フタリシズカ、ギンリョウソウ、コマユミ、アオチドリ、スイヨウボタン、チョウセンゴミシなど花々の説明を指導員の方々から聞き至福のときを過ごしました。今日の喜びはシルクのような花びらのヤマシャクに逢えたことです。悲しかったことは前日指導員さんが見た白いシラネアオイが消えていたことでした。

観察会への参加は私を豊かにしてくれます。自然に触れ、自然を学ぶことは私にとって最高の幸せです。これからも皆さんと共に楽しく学んで行きたいと思います。

札幌市南区真駒内

広中 洋子

窓から見えた三角山

札幌市西区 菅美紀子

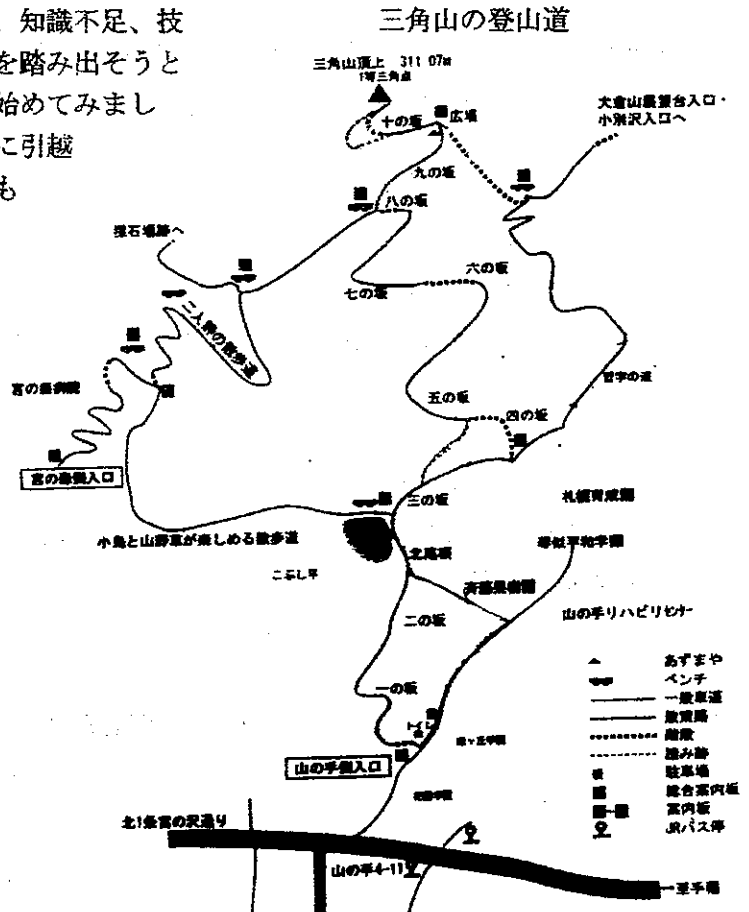
この地に暮らして19年目、どこよりも永く住んだことになる。引っ越して来て一番気に入ったのは窓から三角山と、手稲山が見えたこと。また、山登りがしたいなど、その時思ったことを覚えています。そのころは子ども達も小さく、私の行きたい所は後回しでした。でもそうこうしているうちに、子ども達の母親の口コミで山登りがしたいという同好の士が集まったのです。三角山、円山、藻岩山、手稲山、春香山、朝日岳など日帰りできる山を登り続けて14年目になります。初めのうちはただ山登りがうれしく、花や鳥の名前も何度聞いても右から左へ抜けていました。でも3年目位になると、昔登った山で見たけれど名前もわからない花がいっぱいあったこと、そうして今もこんなに美しく咲いている花の名前さえ知らないのは忘れ物をそのままにしているような、もったいないような気もしてきました。

それから野鳥の会に入り、そこで手にしたウォッチングガイドに載っている行事や講座に行ってみました。これがとても楽しかったのですが、環境破壊が進行していること、何よりも身近な自然がかなりなスピードで失われてきている事、鳥も数を減らし、珍しい花は盗掘にさえ合うこと知りました。だいそれたことに私にも何かできることはないかなどと思ってしまう。なにしろ知っているのはわずかばかりの植物と鳥の名前だけ。このころ受けた札幌市環境教育リーダーの研修は

いろいろ考えさせられました。知識不足、技術不足と思いましたが、一步を踏み出そうと小学校で総合学習の手伝いを始めてみました。それと平行して、現在地に引越

した時、近くの図書館で子ども達に読み聞かせを始めていたので、読む絵本を自然科学中心にしてみました。初めは興味を持ってもらえるかと心配しましたが思った以上に関心を示しました。うれしいことです。

今は三角山の自然環境を見守りながらボラレンとして私にもできることを探していきたくと考えています。



エゾサンショウウオ産卵池の異変

札幌市 田中一典

毎年、残雪がのこる雪解けの頃、エゾサンショウウオは冬眠からさめて、産卵のために、どこからともなく産卵場所の池や沢などにやってきます。

野幌森林公園にも、この頃になると遊歩道脇の水溜まり、林内の湧水池や沢の流れの穏やかな沢水溜まりの場所に、エゾサンショウウオの卵が観られるようになります。

今年は、例年になく雪解けが早く、毎年わたしが定点観察をしている野幌森林公園内の小さな池にも、4月19日には約30程度のエゾサンショウウオの卵塊を確認しました。例年どおりの数であり、中には産んだばかりの膨らみきっていない卵もありました。エゾサンショウウオの卵は、カエルの卵と違い、バナ状に巻いた透明な袋の中に入っています。卵から孵ったオタマジヤクシ(幼生)の頭には、左右に櫛状のエラが3本ずつあり、カエルのオタマジヤクシとの違いがハッキリとわかります。

例年であれば、後発組の産卵サンショウウオもいて、水中で待機しているオスのサンショウウオをみることもありますが、今年は後発組のサンショウウオを確認できませんでした。

5月3日に再び池を観察しに行ったところ、異変が起きていました。通常であれば、広さ2m×1.5m・水深50cm程ある池が、なんと70cm×1m・水深わずか1cmの水溜まりに大変貌していました。非常に小さくなった水溜まりの中には、幼生が密度濃くうごめいていました。水溜まりの周囲には卵が干乾びた状態のものや、卵だけが水から取り残され、卵中にはもうすぐ卵から出る幼生がうごめいているものもありました。まとまった雨が降らない限り、今年の幼生たちが成長するのは絶望的な状態でした。

5月6日には、池の水は完全に干上がってしまいました。例年だと、池の水は満々と水を貯えているところですが、こんな状態は初めての出来事です。今年の5月上旬は、この池ばかりではなく、遊歩道脇の水溜まりや沢水溜まりの水もほとんどない状態でした。

こんなところにも、地球温暖化の影響が出ているのでしょうか。このような状態は、今年だけで終わってほしいと思います。エゾサンショウウオは、4～5年ぐらいで成体になり、産卵池にやって来ると考えられています。5年後の状態が心配なところです。来年は、卵から孵った幼生たちが無事に陸に上ることを祈るしだいです。

地球温暖化、その将来予測

七飯町 岡村 敏夫

☆ 6つのシナリオが語る温暖化の行方

予測結果を示す前に、予測方法について説明しましょう。予測には①地球の大気や海・陸をコンピューターの中に再現する物理法則に基づいた気候モデルと呼ばれるプログラムと、②温室効果ガスの将来の排出量の見積もり(排出シナリオと呼ばれる)が用いられます。

排出シナリオは今後の社会発展や技術革新の方向によって、経済成長、エネルギーの使用量、人口増加や土地利用が大きく変わり、排出される温室効果ガスの量も大きく変わってきます。

このような人間活動をもとにして IPCC (文献2のタイトル参照) では大きく分けて4つの排出シナリオを想定しています。Aは経済重視の高成長型、Bは環境重視の持続的発展型、1は地域格差の小さいグローバル型、2は地域の独自性・多様性を重視した地域型で、これらの組み合わせによって得られるA1(A1は重視するエネルギー源によって(表1参照)、さらにA1B、A1T、A1FIの3グループに細分化)、A2、B1、B2の6つがそのシナリオです(図1)。当然のことですがどのシナリオを採るかによって温暖化の予測結果は大きく変わってきます。

ところで肝心の気候モデルの精度には問題がないのでしょうか? 信頼性が高い、がその答えで、最近の気候や過去の気候変化の特徴をこの気候モデルが非常によく再現できる(歴史実験とも呼ばれる)というのがその理由です。

今世紀末における気温、海面水位の予測結果は表1に示すとおりで、最も大きくなるのはいずれもA1FIシナリオ(化石エネルギー主体、経済重視の高成長型)で、気温変化は最良の見積もりで+4.0℃、可能性の高い予測幅の上限で+6.4℃、海面水位の上昇は予測幅の上限で+59cmにも達しています。排出量予測の総量が最少のB1シナリオ(環境重視のグローバル型)であっても1.8℃の気温上昇が予測されており、20世紀に観測された気温の上昇が0.74℃/100年であったことを考えると、今世紀における上昇の規模・速度の大きさがよく分かりますね。

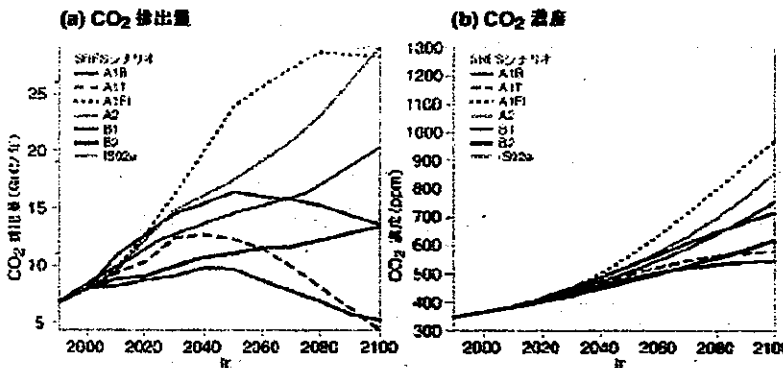


図1 温室効果ガスCO₂の排出シナリオ(文献1を一部改変)
原図はカラー。(a)のグラフの折れ線、2100年時点で上よりA2、A1FI、一つとばしてA1B、B2、B1、A1Tの順。

日本の気象庁気象研究所の地域気候モデルを用いた日本付近の予測結果によれば、約100年後(2081~2100年)には現在(1981~2000年)より年平均気温が2~3℃(北海道の一部では4℃)上昇するとされています(用いたシナリオはA2の経済重視の地域型)。ちなみに今の世界の仕組みをそのまま当てはめた場合のシナ

リオはA2に該当すると言われています。

表1 世界平均地上気温の昇温予測および海面水位の上昇予測(文献2を一部改変)

シナリオ	気温上昇		海面水位上昇
	最良の見積り	可能性が高い予測幅	モデルによる予測幅
A1B シナリオ	2.8℃	1.7 - 4.4℃	0.21 - 0.48 m
A1T シナリオ	2.4℃	1.4 - 3.8℃	0.20 - 0.45 m
★ A1FI シナリオ	4.0℃	2.4 - 6.4℃	0.26 - 0.59 m
A2 シナリオ	3.4℃	2.0 - 5.4℃	0.23 - 0.51 m
☆ B1 シナリオ	1.8℃	1.1 - 2.9℃	0.18 - 0.38 m
B2 シナリオ	2.4℃	1.4 - 3.8℃	0.20 - 0.43 m

注1 上昇は、20世紀末(1980-1999年)を基準とした21世紀末(2090-2099年)における差

注2 A1シナリオは、さらにA1B(非化石エネルギー源のバランス重視)、A1T(非化石エネルギー源重視)、A1FI(化石エネルギー源重視)の3つのグループに細分化される。

☆ +1.5℃を超えるとイエローカード、+3.5℃を超えるとレッドカード

現在の政策を継続した場合、世界の温室効果ガスの排出量は今後20~30年増加し続けその結果、今世紀には20世紀に観測されたものよりさらに大規模な気温上昇が予測されることが分かりました。

温暖化による地球規模の変化としては、積雪・海氷面積の縮小、永久凍土が融解する深さの深まり、極端な高温や熱波の増加、大雨の頻発の増加、熱帯低気圧の強度の増大、中・低緯度での降水量の減少、干ばつの増加等があげられています。

また、温暖化がもたらす生活面・社会面への影響としては、利用可能な水資源の減少、穀物の生産性の低下、健康被害の拡大による社会的負荷の増大、洪水・暴風雨による損害の増加、海面水位上昇による高潮被害の増加、沿岸湿地・河川デルタ・砂浜の消失等があげられています。

さらに地球の生態系に及ぼす影響として、世界平均気温が1.5℃を超えて上昇すれば動植物の最大30%の種が絶滅の危機に、また、3.5℃を超えて上昇すれば動植物の40%以上の種が絶滅する可能性が高いとの衝撃的な影響評価もなされています。

対策はすでに手遅れの時点(Point of no-return)を過ぎてしまっているのでしょうか? 地球温暖化対策の柱となる適応(気候変化に強い、気候変化に耐えられる社会に変える対策)と緩和(温室効果ガスの削減を中心に温暖化を食い止める対策)という二つの面から、地球温暖化問題への国際的な取り組みについては、次号へ続く。

主な参考文献

1. 気象庁2005、異常気象レポート2005 近年における世界の異常気象と気候変動〜その実態と見通し〜 (VII)
2. 気象庁ほか2007、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第4次評価報告書統合報告書(日本語訳)

成田 伸一

古事記神代記も、天の岩屋戸神話に至り先に記した、ヒカゲノカズラ、ササ、テイカカズラ等が登場し、天照、須佐之男の両御神の誓約（うけい）の後須佐之男による狼籍の結果、高天原より追放となり、以降の大和の国に対し出雲の国（葦原中つ國）となり大国主の命の登場となり、出雲の国神話圏へと伸展し、瑞穂の白兔のガマ（先述済）となっています。

話を少し前に戻し、高天原より追放となった須佐之男は各地を放浪の道中で、空腹の為食べ物をオオゲツヒメ（大地母神的な性格を持つ神）に乞い、オオゲツヒメは、鼻や口、また尻からからも、くさぐさ（植物）の美味しい食べ物を取り出し、いろいろに作り整えて持て成したが、その時に、仕業を覗いて見ていた須佐之男はわざとよごして作ったと思ひすぐ様オオゲツヒメを斬り殺してしまった時、殺されたオオゲツヒメの身に次々にものが生まれてきて、頭には蚕が、二つの目より稲が生まれ、二つ耳には粟が生まれ、鼻には小豆が生まれ、陰（ホト、女性性器）には麦が、尻より大豆が生まれたとされています。

これは、五穀を意味し、養蚕が穀物栽培とともに古く重要な生業と考えられていた事が解かります。一般に五穀豊穰の五穀とは、イネ、ムギ、アワ、マメ等にキビまたはヒエを加えこの内アワ、キビ、ヒエは痩せ地でもよく生育するので、イネやムギの耕作に向かない土地の食料として重要な役割を果たしてきました。

イネ稲 *Oryza*（アラビア語の *eruz* 米より）*sativa*（栽培された）紀元前4千年以前に、インドのアッサム地方から中国の雲南省にかけての地域で栽培が始まり、日本へは中国を経て、縄文時代後期に伝わったとされています。米粒の丸い日本型と細長いインド型に分類、それぞれにウルチ種（炊飯用）と、モチ種（餅用）がある。

アワ粟 *Setaria* (*seta* 剛毛に由来小穂基部を囲む剛毛からついた)食料、飼料用に栽培される一年草、古くよりユーラシア大陸で栽培されていた穀物で、エノコログサの仲間から育成されたものとされている。原産地については諸説があり、紀元前五千一四千年には黄河地域で栽培されていたらしい。稲同様にウルチ種とモチ種がある。

キビ黍 *Panicum* (*panus* キビの穂に由来) *miliaceum* (キビの様な、イブキヌカボ属 *milium* の様な) 実が黄色がかった事から黄実、これが変化してキビ、古代からユーラシア全域で栽培されてきたが、今日昨今ではバイオ燃料として存在価値を高めている様 -----

ヒエ稗 *Echinochloa* (*echinos* ウニまたはハリネズミ + *pos* 足であったものをリンネが *ops* 姿をするもの、に変えた。球形の頭状花集団がとげだらけにみえるから) *utikis* (結うよう有用な) 日本では古くから栽培されて来た雑穀で、稲作に向かない山村の主食として位置な役割を占めていた。

小豆 *Vigna* (人名 17世紀イタリアの自然科学者) *angularis* (稜のある、角ばった) 中国では二千年前から栽培され、日本には中国から入り、奈良時代には栽培されていたとされる一年草で、高温を好むが、夜間の気温が高くなるとよく結実しない。日本では、北海道や、山間地で多く栽培されています。

大豆 *Glycin* (*glyceros* 甘いダイズの味よりついた) *max* (語源不明) 中国が原産地と考えられる一年草、マメ類の中で最も主要な作物として、古くから栽培されてきた。このダイズの原種はツルマメ *Glycine soja* で通称ツルマメで種小名 *soya* は醤油の意味です。野生のヤブマメに比べ豆果に毛が多くあります。

ムギ麦 大麦 *Hordeum* (オオムギのラテン古名) *vulgare* (通常の) 穂の形により、六条大麦、四条大麦 二条大麦に分けられ食料、味噌醤油ビールの原料。

小麦 *Triticum* (*tritus* 磨ったに由来、コムギの古ラテン名) *aestivum* (夏の) 西アジア原産重要穀物で、世界中で栽培され春小麦、冬小麦がある。古来より民族移動により多数の種類がある。

以上麦の種類についての記述が、古事記、日本書記共に不明になって居り簡略になっています。

古事記では稲、粟、小豆、麦、大豆を五穀とし、日本書記では、稲、粟、稗、豆、麦としています。時には古事記でも書記と同様になっている時もあります。この事は、古事記は古い写本、即ち諸本の成立を理解することにより判断されます。

諸本を大別すると、伊勢系、卜部系(ウラベ)の二門に大別され、前者は伊勢神道の流れを汲む真福寺本系のことで、真福寺本三冊を始めとして、道果本(上巻一冊)、道祥本(伊勢本ともいう)、その他に、春ゆ本(上巻一冊 伊勢一本ともいう)等があり、時代考証により書き換えがされ多少の変更あることで理解をして下さい。

何れにしろ、稲だけが特権化されず麦や粟、稗、豆等の穀物類が並べられているのは、日本列島の農耕を興味をもって考えることができます。

先述の、オオゲツヒメの死体より穀物が誕生する神話はインドネシア等南太平洋一帯に分布しハイヌヴェレ型穀物神話と呼ばれ、フィリピンにも、神が水中より出現し、石とバナナの何れが良いかといった神話もあるようです。

オオゲツヒメの惨殺、その死体より五穀の発生のさまを見ていたのが、造化參神(古事記の最初に出現したアマノミナカヌシ、タカムスヒ、カムムスシヒの參神)中のカムムスシヒの母親であった。これを須佐之男に採取をさせもろもろの実のなる草の種として、改めて須佐之男に授け高天原より地上にもたされ、現在われわれの食料はこうして生まれ、われらの土に植ええられることになったと印されています。

遠ざけられ追われた須佐之男は、出雲の国の肥の河のほとり、鳥髪に降り、その後八咫の遠呂智(ヤマタノオロチ)神話となり、その後、櫛名田比売、(日本書記では奇稻田姫)との出会い、稲穂をもたらす須佐之男と、靈妙な稻田の女神との結婚と出雲圏神話へと続く。

最後に、二人の新居の句で、須佐之男の作とされていますが、後に挿入されたとの説

も。

八雲立つ出雲八垣妻籠みに 八重垣作るその八重垣を

この歌は、祝婚歌として伝えられたもので、古事記では定型音数律（五、七、五、七、七）をもつ短歌形式に整えられているが、口頭で歌われていた時には短歌形式でなかったとも……

八雲立つ出雲八垣とは、出雲の湧きたつ雲と鬱蒼たる杉の本立を表現しています。

以上

・参考文献

口語訳 古事記	三浦 佑之 著	文芸春秋社
古事記への旅	萩原 朝男 著	NHKブックス
花と神話と伝説	C.M.スキナ 著	八坂書房
花精伝説	L.ディーズ 著	八坂書房
植物学ラテン語辞典	豊国 秀夫 著	至文堂
有用植物和・英・学名便覧	由田 宏一 著	北海道大学図書刊行会
四季の花事典	麓 次郎 著	八坂書房
季節の花事典	麓 次郎 著	八坂書房
花の神話学	多田 智満子 著	白水社

アポイ登山・研修で出会ったカナダの研究者からの手紙

今日にアポイ岳へのぼりました。

20年6月1日

本当にたのしかったです。また来年も
おもしろいカナダの住所、

Dillon CHRIMES
ディロン クライムズ

2577 SELWYN RD.
VICTORIA, BC, CANADA.
V9B 3L2.

mail: d_chrimmes@yahoo.se

tel: 1-250-478-0627

よろしくお願ひします。

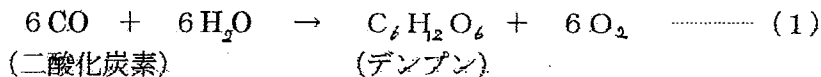
コケを訪ねて

— 地球温暖化に寄せて —

札幌市 吉田 政徳

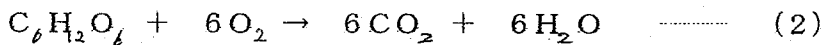
地球温暖化の原因は、石炭や石油などの化石燃料の燃焼や森林の伐採によることが、すでに分かっていました。もっと早くに手を打てなかったものでしょうか。

環境問題を考えるとき、地球環境を支えている植物の生き方の基本を理解しなければならぬと思います。その生き方の基本とは、植物の光合成(1)と呼吸(2)のはたらきです。



「シーノロク、エッチノジューニ、オーノロク」昔、どこかで聞いた懐かしいひびきです。

植物は二酸化炭素を光合成によって、デンプンに換えてくれます。しかし、植物も呼吸し、その遺体を分解してくれるキノコ類も呼吸しています。それで、再び大気の中に二酸化炭素が戻っていきます。



それでも二酸化炭素は海水の中に溶けるため、温暖化の問題はありませんでした。ところが、人間や家畜の数が増えたり、車の利用や暖房に化石燃料を使ったり、おまけに森林の伐採により、二酸化炭素が増えてきました。そのために、植物のはたらきや海水の容量では、もはや処理しきれなくなりました。二酸化炭素はビニルハウスのようになり、地球はその温室に入ってしまったというわけです。

地球温暖化のほかにも二酸化炭素が海水に溶けることによって海水が酸性になります。するとクリオーネの絶滅や生物の生態系に大きな影響を与えるといわれます。現在、海水のPHは8.1ですから酸性化する日も時間の問題ではないでしょうか。

二酸化炭素の増加は深刻な事態をむかえ、世界の大きな課題になっています。日本の二酸化削減目標は6%、北海道は10%です。地域では自然エネルギーの活用やゴミ分別の工夫、企業では省エネ製品の開発、団体では緑をとり戻す植林、一般家庭でのこまめな節電、個人ではゴミ拾いの奉仕活動、交通手段に自転車の利用などなど。最近ではヒツジやウシなどの反芻動物のゲップから出るメタンガスも地球を温暖化しているそうです。そこでメタンガスの発生を抑える飼料の研究をしている大学が道内にあります。

トヨタコサミットでは、日本人の知恵と努力による削減の事例を世界にアピールし

ながら、日本がリーダーシップを発揮してほしいものです。

自然のしくみを基本から理解し、環境問題を自分の問題としてとらえ、二酸化炭素の削減を実行に移していくならば、地球の再生は不可能ではありません。私もマイカー利用を2回のところを1回の割りにしたいと思います。便利な生活を控えることは易しいことではありませんが、今の目先にとらわれず、明日の地球を見つめながら、小さな一歩を踏み出したいと思います。

前置きが長くなりましたが、次にコケを訪ねてみました。

＜ キャラボクゴケ ＞ ー幻の羽ー

大沢園地を後にして、カツラコースに入りました。両側の山が手の届くところまで近づいてきました。500メートルぐらい歩いたでしょうか。左側に朽ち果てたカツラの洞（うろ）がありました。直径は優に1mを超えています。伐採したあとの根株と思われます。いまにも崩れ落ちそうに腐木化し、胸までの高さを残していました。

ドロ亀先生は、北海道で最も男性的な木としてカシワを、最も女性的な木としてシラカンバとカツラを挙げています。「シラカバには夢多き乙女の感傷を、カツラには母性愛を感じず」とおっしゃっていたそうです（北海道の樹木と民族 伊達興治）。そこには、ゆったりとした、往時の優しい面影が偲べれます。

その洞の内壁にモスグリーンをした羽状のコケが生えていました。ヒカリゴケ？、疑ってしまいました。

が、よく観察すると葉の様子が違います。羽状の葉は想像上とされる鳳凰（ほうおう）の羽に似ています。茎には7-12対の葉が左右に並んでいます。イチイ科のキャラボクゴケに似ていることから、この名前がついたのでしょう。中助（ちゅうろく）ははっきりして、葉先から短くとび出しています。葉は乾いてもあまり縮れないようです。このコケは蘚類のホオウゴケ科の仲間です。よく似た仲間にヒメホウオウゴケがあります。このコケの中助は葉先まで伸びますが、とび出ることはありません。



x3
キャラボクゴケ

北海道の花 <ハマナス>の独り言

ハ はるか遠い過去から
マ 真っ赤な美しい花をつけ
ナ 長生（ながい）きしたいと思って
ス 住みついたのが北の海辺の砂地なんだよ

《日高より発信》 ヒメヨモギとマルバヤハズソウ

川村 桂介

最近、ヒメヨモギが農道の両側の法面などに増えてきている。そこは、近年道路の拡幅工事が施されたように思われる所である。茎は紫色を帯びてよく分枝するがそれほど広がらず真っ直に伸び、葉は羽状に深裂している。初めて見た時には、オオヨモギが草払い機等で刈り取られ、その後に茎からいじけて伸び出たものとばかり思っていたのであが、次の年も同じような様子で伸びていたので採集して調べてみたところヒメヨモギであった。しかし、ヒメヨモギの分布地域は熱帯から温帯で、本来なら北海道には生育していない植物である。図鑑には本州から九州、朝鮮、中国に分布するとなっている。

また、沙流川の氾濫原（河原の草地や堤防）で採集したヤハズソウはマルバヤハズソウであった。この植物の分布地域は本州から九州、朝鮮、中国、ウズリーとなっている、これも本来なら北海道には無い植物なのである。ヤハズソウだとばかり思っていて、たまたま花を付けているのに出会ったものだからじっくり観察してみようと思い持ち帰ったのである。しかし、それがマルバヤハズソウだったのである。次の日、再び沙流川にいて何ヶ所か別な場所で採集し調べてみたが、河原に生えているものは全部マルバヤハズソウであった。

この2種類の植物は、生育している場所から推察して、明らかに道路の拡幅工事や川の護岸工事の後に災害防止のために施された芝草や緑化のために撒かれた種子に由来するものと考えられる。どちらの植物も日本国内にも朝鮮や中国などのアジア東北部にも分布することになっている。それではこの平取町に生えているヒメヨモギとマルバヤハズソウは、一体何処から来たのだろうか。本州や九州等に生育している在来種が持ち込まれたのだろうか、それとも朝鮮辺りからやってきた外来種なのだろうか。これらの工事の後の緑化や土砂の流出防止のために、いったいどのような芝草や種子が利用されたのだろうか。

最近、土地の補強や緑化のために散布する種子は、収集する時の人件費が安くつくということで、韓国や中国など近隣の国々の種子が使われることが多いとのことである（日本の帰化植物：平凡社）。そのようなことを考えあわせると、この在来種か外来種かの判定は遺伝子の段階まで調べないと分からないことである。しかし、沙流川の堤防には中国や朝鮮などのアジア東北部を原産とするカラメドハギやオオバメドハギが生育していることや、義経公園の中を流れる小川の土手にはヒメヨモギとオオバメドハギが混生していることなどからどちらの植物も中国や朝鮮辺りから芝草の種として持ち込まれ、それらの植物が帰化し増えてきているものと考えられなくもない。

その判定はどうであれ、ヒメヨモギもマルバヤハズソウもこの平取町の環境に適応し馴化しながらその数を増やしていることは確かである。

マルバヤハズソウについては、高橋誼先生による「門別町の植物」の中にも報告されていることから、平取、富川と日高西部地域（沙流川流域）に広がっているようである。

クワコのこと

苫小牧市 谷口勇五郎

5~6歳のころ、食べるのがやっとの5反百姓の私家でも、カイコ（カイコガの幼虫）を少し飼っていました。羽化したばかりの小さな幼虫を分けてもらい、クワの葉を与えました。私の家では畑のふちにクワの木を数本植えていました。カイコはだんだん大きくなりクワの葉をかじるサワサワと音がしました。繭が作られ、煮て、糸を取り出し、真綿を作り、出荷した分もあったと思います。当時の農家はお金を得る有効な手段でした。隣家は2~3町歩を持つ大農家で、広い畑の中にクワの木が30m間隔ぐらいに沢山植わっていました。夏休み、近所の子供達と手拭で作ったふんどしをつけ、堤で水浴び、後に、隣のクワ畑に入り、熟した実を食べました。長さ2.5cm（ヤマグワの5倍ほどの体積）もあり、よいおやつでした。夏休みと言えば、古里での水浴び、クワの実、アブラゼミの声、入道雲と夕立などを思い出します。



昨年（07年）の暮れ、いつもの長いコースの散歩の途中、豊木川（豊川町と日新町の境の小川）沿いの木工場のそばの木にヒラヒラしたものがぶら下がっているのに気がつきました。どうやら繭のような感じがします。繭といえばウスタビガぐらいしか知らないので、その時は何だろうと思う程度でした。裏山を越え、出口の横に人の丈ほどの木があり、それに同じ繭がいくつか付いています。ぼんやり見ていると、木に白っぽいビニールテープが付いて風に吹かれているような感じです。1個もらい、調べるとどうやらクワコ（桑子）の繭のようです。カイコの野生種で、中国でクワコ（カイコガは飛べないのに、これは飛べる）を飼い馴らし、カイコに改良したというのです。多くの昆虫のうち、人に飼い馴らされ改良されたのはカイコとミツバチだけといます。

次の日、木工場そばのヤマグワの木には、繭が枯れ葉でおおわれているものと、はがれて糸がむき出しになっているものと、10個ほどぶら下がっていました。その後、色々な場所でヤマグワの木にぶら下がっていました。天敵の関係なのか、林の中にはなく、道路沿いや川沿いに多い感じです。羽化は秋というのですから繭のある木に卵があると思い、裏山の出口の木で調べてみました。皮目（木の茎や枝にある空気を通す組織）が凸っぱり卵のように見えますが、ついに枝の下側に灰色で丸くへこんだ直径1mmの卵が10個ほどありました。しかし、クワコのものか否かは、はっきりしません。林縁や道路沿いにヤマグワの木があればクワコの空の繭が風に揺れているのが見られるかも知れません。図はクワコの繭で実物の0.8倍です。

いい案内人になりたい (3)

春日 順雄

(3) 持続可能な

レイチェル・カーソンの「沈黙の春」

地球環境に対する警告の書、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』(Silent Spring) が発刊されたのは、1962年のことです。以下、『レイチェル・カーソンが問いかけたもの』(原強著・かもがわ出版)をもとに紹介します。

『沈黙の春』は「DDTなどの農薬、殺虫剤が止めどなく使用されたとき、自然の生態系はどうなるのか。そこに生きる生物はどうなるのか。さらには、人間に対する影響はないかを問いかけたもの。」です。このことについて4つの柱で書かれています。

- おそろべき力、「この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが互いに力を及ぼし合いながら生命の歴史を織りなしてきた。地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものに過ぎない。だが、20世紀というわずかの間に、人間という一族が恐るべき力を手に入れて、自然を変えようとしている。」
- 生物の連鎖が毒の連鎖に変わる、「食物連鎖・生物濃縮」
- 最後は人間、「毒の連鎖の最後は人間」
- 別の道へ、「私たちの住んでいる地球は、人間だけのものではない。」の認識のもと、かけがいのない生命と環境を守るための、あらたなる可能性と探求への努力を惜しんではならない。

以上が、『沈黙の春』の要旨です。

『レイチェル・カーソンが問いかけたもの』では、さらに、「未来へのバトン～レイチェル・カーソン研究の課題」として、環境倫理学について述べています。

- 環境倫理学「環境問題が深刻化するなかで、倫理学の課題として、人間と自然、環境の関係における規範、価値基準はいかにあるべきかという課題意識の基に誕生した。」
- 加藤尚武「環境倫理学のすすめ」 三つの基本主張
 - ・自然の生存権の問題「人間だけでなく、生物の種、生態系、景観などにも生存の権利があるので、勝手にそれを否定してはならない。」
 - ・世代間倫理の問題「現代世代には、未来世代の生存、可能性に対して責任がある。」
 - ・地球全体主義「地球の生態系は、開いた宇宙ではなく、閉じた世界である。」

『新・環境倫理学のすすめ』から

さて、いよいよ、「持続可能性についてです。この概念は、1987年に発表された国連の「ブルントランド委員会報告書」邦訳「地球の未来を守るために」によって確立されたということになっています。(以下、『新・環境倫理学のすすめ』P19から)

- ① 持続可能な開発とは、未来の世代が自分たち自身の欲求を満たすための能力を減少させ

ないように、現在の世代の欲求を満たすような開発である。

- ② 持続可能な開発は、地球上の生命を支えている自然のシステム—大気、水、土、生物—を危険にさらすものであってはならない。
- ③ 持続的開発のためには、大気、水、その他自然への好ましくない影響を最小限に抑制し、生態系の全体的な保全を図ることが必要である。
- ④ 持続的開発とは、天然資源の開発、投資の方向、技術開発の方向付け、制度の改革がすべて一つにまとまり、現在及び将来の人間の欲求と願望を満たす能力を高めるように変化していく過程を言う。

また、ハーマン・デイリーは、持続可能な発展のための三つの条件を次のように示している。(以下、『新・環境倫理学のすすめ』P27から)

- ① 土壌、水、森林、魚など再生可能な資源の持続可能な利用速度は、再生速度を超えるものであってはならない。(たとえば魚の場合、残り魚が繁殖することで補充できる程度の速度で捕獲すれば持続可能である)
- ② 化石燃料、良質鉱石、[地層に閉じ込められていて循環しない]化石水など、再生不可能な資源の持続可能な利用速度は、再生可能な資源を持続可能なペースで利用することで代替できる限界を超えてはならない(石油使用を例にとると、埋蔵量を使い果たした後にも同等量の再生可能エネルギーが入手できるよう、石油使用による利益の一部を自動的に太陽熱収集器や植林に投資するのが、持続可能な利用の仕方ということになる)
- ③ 汚染物質の持続可能な排出速度は、環境がそうした物質を循環し吸収し無害化できる速度を超えるものであってはならない(たとえば、下水を川や湖に流す場合には、水生生態系が栄養分を吸収できるペースでなければ持続可能とはいえない)

時あたかも枯渇型資源の原油の問題で世界中が困ったことに直面しています。7月開催の「洞爺湖サミット」では、二酸化炭素削減、温暖化が重要課題です。まさに、地球が生態系でも、環境においても閉ざされた体系にありますから、全世界の共通した理解のもとに打開を図らなければならないことなのです。

環境倫理学の三つの柱、①自然の生存権の問題、②世代間倫理の問題、③地球全体主義は、どれも説得力を持ったものです。宇宙船地球号は、今ある姿にまで育ってきた歴史を宿し、ともに生活してきた沢山の生物を宿し、絶妙なバランスの上に成り立っています。いま、宇宙船地球号が危ないのは、共通意識として共有しなければならないことでありましょう。次の世代に、今ある生物の多様性をはじめとする健康な宇宙船地球号を引き継いでいきたいものであります。その為の手段の一つとして、枯渇型の資源をできるだけケチって使う、再生可能な資源を上手に使うことも大切です。「持続可能な」は、このように、大きな概念、宇宙船地球号の再生をかけた言葉遣いです。

平成20年度

北海道ボランティア・レンジャー協議会 第1回役員会

日時：平成20年5月12日（月） 18：30～

会場：札幌エルプラザ会議コーナー

参加：田村・五十嵐・佐藤・春日・三崎・橋場・小林・伊藤・今村・熊野・佐藤敏・菅・田中・村上・室野・
欠席：内山・高松・中林

I、開会

II、会長挨拶

III、報告事項

1、総務部

- (1) 総会に関して
- (2) 会員の動向
- (3) 各部仮支払いなど、会計について
- (4) その他

2、研修部

- (1) 4月24日（木） 観察会「春の花を見つけよう」について 一般60名 ボラレン15名
- (2) 4月27日（日）小樽、小樽博物館、札幌の共催「赤岩山と胎内巡り」について
一般60名 札幌からのボラレン8名
- (3) 5月11日（日） 「春のありがとう観察会」について 一般49名 ボラレン8+2=10名
- (5) アポイ研修会・東大演習林研修会の参加者募集について

3、広報部

4、事務局

- (1) 4月26日（土） 総会 会員数142 本人出席34 委任状107
・年間観察会、研修予定は今後、役員会の決定事項として行う。
・年間、30000円を積み立てる。見直しが必要な場合は役員会に諮る。
- (2)
・機関誌「エゾマツ」を、立花氏にも届けてほしいのメールあり。
北海道環境生活部環境局自然環境課野幌森林公園分室 主査 立花 英之
〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53番地2 TEL011-898-0455
- (3) 札幌市環境プラザへ、講演会報告書作成提出
- (6) 5月13日（火） 第11回環境道民会議総会 教育文化会館 15:00-17:30
会長と春日出席
- (7) 5月16日（金） 「さぼーとほっと基金」団体登録・助成に関する説明会
札幌エルプラザ2F 第1・2会議室

IV、議事

(1) 役員の仕事分担

事務局	○春日・佐藤俊幸
総務部	○三崎・橋場
研修部	○小林・五十嵐・伊藤・今村・田中・中林・高松・村上・室野
広報部	○佐藤・内山・熊野・田村・三崎・菅

(2) 総務部

- ① 「自然観察ハンドブック」の販売について（事後承認の要素が強いが）
観察会などで、希望者に一冊500円で、販売する。会員の中でもさらに欲しい人は、送料実費で販売します。

(3) 研究部

- ① 観察会・研修会の当番について～20年度予定表に記入
- ② 野幌森林公園の「花暦」を作ろう
- ③ アボイの研修会について（5月31日～6月1日<土・日>）
- ④ 東大演習林研修会（6月27日～28日<金・土>）
- ⑤ 鶴川研修会（8月30日～31日<土・日>）

(4) 広報部 次号の内容

- ① 総会の内容
- ② 育成研修会のPR
- ③ その他

(4) 事務局

- ① 「自然観察ハンドブック」の訂正について 恥ずかしいミスが見つかった。広報で訂正とお詫びの文を載せる。
- ② ホームページについて 今年度は会長担当、来年度からは事務局担当で行う。
- ③ メーリングリストについて 非常に便利なものであるが、会員の意見も聞く必要がある。6月発行の広報に、会員の意見を聞く記事を載せる。その結果によって、実施したい。
- ④ 育成研修会の取り組み・9月26日（金）～28日（日） 研修部プラス内山・熊野で特別委員会を立ち上げ、できるだけ計画段階からかかわっていく。
- ⑤ 観察会の案内人として育つ
観察会の案内人として育っていくために、下見の日の学習に参加し、観察会当日は参加者の立場で臨むということを大切にしましょう。新しくボラレンに入った人の参加をお願いしたい。
さらに、下見後の観察情報の交流をお座なりにしない方向で実施していきましょう。そして、学びあいましょう。
- ⑥ 主催事業の広報活動
 - ・ウォッチングガイド
 - ・「自然観察会のご案内」チラシの配布
区民センター（50部ずつ配布） 中央・北・南・東・西・豊平・清田・手稲・厚別・白石
西岡水源地公園事務所・自然ふれあい交流館・札幌エルプラザ
- ⑦ より実践的な活動を求めて これは、今年一年かけて、方向を見定めたい
- ⑧ 車の相乗りで出掛ける場合について 研修部で、アボイの事前までに案を提示する
- ⑨ アボイ・富良野・鶴川について

V、連絡事項

- 1, 次回予定 9月17日（水）

VI、閉会

自然観察ハンドブックの訂正 13ページ

- エゾマツの球果のところ 「上向きにつき⇒下向きにつき」と訂正
- トドマツの球果のところ 「下向きにつき⇒上向きにつき」と訂正

編集委員として、誠にお粗末なミスで恥じ入っております。何度もみなおしました。

この場所も間違いはなかったのに、ミステリー気味で、まいりました。お詫びして訂正させていただきます。

メーリングリスト開設のお知らせ

平成 20 年 6 月 23 日

事務局 佐藤 敏幸

会員相互の情報交換などを電子メールで運営できるよう、当会専用のメーリングリストを開設しました。観察会説明員人数の把握や自然情報の交換など、有効な運営・活用を行いたく、多くの皆さんの参加をお願いします。詳細は下記の通りです。

記

1. メーリングリストの概要

電子メールで宛先を【hbr-ml@freeml.com】に送信すると、登録会員すべてに共通で配信されるものです。(写真添付も可能)

2. 活用の例

- ・観察会説明員の事前把握 ・各種催し案内配信 ・自然情報の交換
- ・疑問質問&回答 ・知識の習得 ・全道会員の交流 等々

3. 参加方法

事務局ML担当「佐藤敏幸」の下記アドレスに「メーリングリスト参加希望」の件名で、ご自分の「お名前」と「メールアドレス」を送信してください。折り返し参加案内のメールを返信し、メーリングリストに登録され、参加可能となります。

参加希望メール送信先→ dct-bin2@diana.dti.ne.jp

4. 携帯電話

携帯電話のメールでも参加可能です。上記同様に携帯から「参加希望」のメールを送信ください。なおパソコンと携帯両方登録されたい方はメール時に携帯のアドレスをご記入ください。

5. その他

- ・今回使用するメーリングリストは、利用実績が多くウィルスやスパム対策のしっかりした「無料のサイト」を使用するため、メールの末尾に広告が添付されます。
- ・参加案内のメールの項で「freemlの新規会員登録(無料)」は未登録でも使えますが、登録すると過去のメール検索やWeb感覚(ホームページ感覚)で閲覧可能です。

不明点など問合せ先

事務局・メーリングリスト担当 佐藤 敏幸

電話:011-895-8998 携帯:090-3116-5325

電子メール:dct-bin2@diana.dti.ne.jp

以上

オホーツク支部秋季研修会について

日頃より、お世話になり厚くお礼申し上げます。

さて、標記について、下記のとおり開催する予定となっておりますので、宜しくお願い致します。

記

1. テーマ 西興部村の植物について（講座と秋の花フィールド観察会）
2. 日 時 平成20年9月15日（日）
午前9：00～12：00（講義は約1時間）
3. 場 所 紋別郡西興部村字西興部
・講義会場 西興部村公民館(ホテル森夢内)
・野外観察 西興部村森林公園内フィールド
4. 具体的な内容 西興部村において「西興部村の植物」をテーマに西興部村郷土博物館講座が、年3回開催されており、秋の講座にオホーツク支部が便乗させて頂き参加する事にしましたものです。講座については、酪農学園大学の先生が講師になり、フィールド調査、観察した場所のマップ作成と花の固定などの研修する。又、地元住民、酪農学園大学の 学生も参加が予定されている。

※ 宿泊先の紹介 支部会員以外の方は「ホテル森夢(リム)」☎ 01588(87)2000
一泊二食付@7,600円/名(素泊まり4,200円/名)に予約が可能です。

※ 連絡先 網走市潮見5丁目122-15
ボランティアレンジャーオホーツク支部事務局
法師人春輝(ほしとはるき)☎0152-43-1942

ボランティア・レンジャー育成研修会

受講者募集



北海道には豊かな自然がたくさんあります。この豊かな自然をより多くの人に楽しんでもらい、また自然環境を大切にしてもらうために「ボランティア・レンジャー（自然解説員）」が、各方面で活躍しています。

今年も自然ふれあい交流館や野幌森林公園をフィールドにして「ボランティア・レンジャー」を育成する研修会を開催します。

「自然」に興味・関心がある方、自然の中でボランティア活動をやってみたい方など、初心者向けの内容となっていますのでお気軽にご参加下さい。

人と自然との橋渡し役でもある「ボランティア・レンジャー」になりませんか！

◇開催日 平成20年9月26日（金）～28日（日） 3日間の研修会です（雨天決行）

◇場所 自然ふれあい交流館、野幌森林公園

◇内容
 26日（金） 自然と楽しむ「アウトドアゲーム」、安全管理のための「救急法」
 27日（土） 野幌森林公園に関する「講演」、自然体験・観察の「プログラム作成と解説方法 人と自然との関わり方の「観察会」「ナイトウォッチング」
 28日（日） 「プログラムのフィールド発表」など
 ※ 詳しいプログラムは裏面に記載しております。

◇費用 無料
 ※宿泊費、現地までの交通費、食事代などは各自負担願います。
 ※各当日は原則、現地集合、現地解散となります。
 ※自然ふれあい交流館（大沢口）の駐車場は無料。



◇定員 30名（7月1日より受付開始。なお、定員になり次第締め切り致します。）

◇対象 3日間通して参加できる方、満18歳以上で自然に興味・関心がある方

◇申込方法 ご希望の方は電話にて「氏名」「住所」「電話番号」「年齢」「交通手段（自家用車 公共交通機関）」をお伝えいただくか、FAX・メールで記入いただき送付して下さい。

◇その他 当研修会に受講された方には、受講証と自然解説員のバッジを交付いたします。また「北海道ボランティア・レンジャー協議会」への入会も可能です。（希望者のみ）

主催：自然ふれあい交流館 共催：北海道ボランティア・レンジャー協議会

お申し込み・お問い合わせ先・・・

北海道立野幌森林公園 自然ふれあい交流館

〒069-0832 江別市西野幌685-1

電話 011-386-5832 FAX 011-388-7058

メール nfpvc@kaitaku.or.jp

ボランティア・レンジャー育成研修会 2008 ～プログラム～

○1日目【9月26日(金)】・・・場所：自然ふれあい交流館、野幌森林公園

時間	内容
9:30～10:00	集合・受付（自然ふれあい交流館）
10:00～10:30	開講式・オリエンテーション
10:30～12:00	野外実習【アウトドアゲーム】 ～自然とのふれあいを楽しむ
12:00～13:00	休憩（昼食）
13:00～16:00	救急法・リスクマネジメント
16:10～17:00	講義【自然について】
17:00	終了・解散

○2日目【9月27日(土)】・・・場所：自然ふれあい交流館、野幌森林公園

時間	内容
9:30～10:00	集合・受付（自然ふれあい交流館）
10:00～10:10	オリエンテーション
10:10～12:10	野外実習【自然観察会】 ～ボランティア・レンジャーの活動の実際 ～自然体験活動の指導法
12:10～13:00	休憩（昼食）
13:00～14:30	講義【野幌森林公園】 講師：村野紀雄氏（酪農学園大学 教授）
14:40～15:10	講義【プログラム作成と解説方法（導入）】
15:10～17:30	実習【プログラム作成と解説方法】 ～グループワーク～
17:40～19:00	野外実習【ナイトウォッチング】
19:00	終了

○3日目【9月28日(日)】・・・場所：自然ふれあい交流館、野幌森林公園

時間	内容
9:30～10:00	集合・受付（自然ふれあい交流館）
10:00～10:10	オリエンテーション
10:10～11:30	実習【プログラム作成】 ～グループワーク～
11:30～12:30	休憩（昼食）
12:30～15:00	発表【フィールド発表】
15:00～15:30	ふりかえり
15:30～16:00	まとめ・講義 【北海道ボランティア・レンジャー協議会と、 ボランティアを行うにあたって】
16:00～16:30	閉校式・アンケート記入、解散

◇持ち物：野外活動に適した服装（長袖・長ズボン）、雨具、昼食・2日目夜の軽食など

◇アクセス：新札幌バスターミナル北レーン10番乗り場より

自然ふれあい交流館へは・・・JRバス「文京台循環線」乗車、[文京台南町]下車、徒歩10分

指定管理者制度が導入され、野外博物館北海道開拓の村を管理運営している(財)北海道開拓の村が、平成19年4月1日より自然ふれあい交流館を管理運営しております。

編 集 後 記

- ・表紙のステキな花々がおりなす世界の絵は富良野の宮田和恵さんが描いてくれました。今回の富良野の研修会（6月27～28日）では、宮田さんが「太陽の里・ふれあいの森」をガイドしてくれると思います。楽しみです。
- ・初めての「アポイ岳登山・研修会」 様似教育委員会の水野洋一さん、アポイフアンクラブの田中正人さんをはじめ多くの方々にお世話になって、登山・研修会が成功したことをとても嬉しく思います。
アポイクワガタ、アポイアズマギクなど多くの固有種に出会えたが、ヒダカソウなどは見られなかったようです。登山者のマナーの悪さ、盗掘そして地球温暖化などで貴重な固有種が減っているそうです。
今後、アポイフアンクラブの皆さんと協力して、「かけがいのないアポイ岳」(only one Apoi Mountain) を守っていくようにしていきたい。
- ・東大演習林の宮本先生に同行されたカナダの研究者ディロンさんから、早速、日本語で手紙をいただきました。研修された内容に関しては後にインターネットで、私たちの役員のところへ配信してくれるそうです。何れ掲載も。
- ・今回は総会、役員会などの資料、会員の皆さんからの寄稿もあってボリュームのある冊子ができました。今後、更に充実した機関誌をつくっていきたい。
- ・次号（86号）では、＜東大演習林での研修＞の特集をくみたい。原稿は10月15日まで、広報部、北広島の佐藤 清一まで。

エ 縁あって北のガイア（大地の女神、
ギリシア神話から）のところで
ゾ 造林などをしてくれて
マ まだまだ続けてほしいよ
ツ 常に自然・環境を意識して、
こまで以上に生きたいよ

「エゾマツ」85号

夏季号

2008年6月23日

会長 田村 允郁